

---

# 限られた時間の中で

三亜野 雪子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

限られた時間の中で

### 【Nコード】

N6630B

### 【作者名】

三亜野 雪子

### 【あらすじ】

一人になりたくて、見つけたのはあの屋上。そのお陰で君に出逢えたんだ。そのお陰で僕は一人じゃなかった。お互いにお互いのこと何も知らずに僕らは魅かれていく。どんなに時間がたっても君の生活の場はやっぱり 真っ白な薬の匂いがするこの病院。どうして僕らは互いを求めてしまったんだろう。

## 出逢い

肌寒くなつた季節に

君と僕は出会つた

真つ青な空を眺める十六、七の少年。ここは市立病院の屋上。普段は人が来るような場所ではない。だからこそこの少年はここにいる。誰にも会いたくないから。

「はあ」

思わず溜め息をついた。何かするわけじゃない。ただ、その場にいるだけ。今日もそれで終わると思っていた。

「あ、先客？」

明るい声で屋上に上ってきたのは同じ年くらいの少女。肩につくくらしいの黒髪が風に揺れて、大きく綺麗な瞳を持つ人だった。

「……………」

「こんにちは！互いに暇な毎日ねー！何してたの？」

陽気に話しかける彼女に何の言葉も返さず視線をそらした。それでもめげずに言葉をかける。

「私、ここに半年もいるんだ！だから、もうゲームもあきちゃって。貴方は何して暇を潰すの？」

「……………」

「ねえ、聞いてる？」

「うるさい！何だよいきなり馴れなれしく！話しかけるな！」

初めて聞いた言葉はこれだった。彼女は怯みも怒りもせずただ微笑んだ。それが意外で彼は言葉を止める。

「私ね、神経図太いの。だからそんなことで話すのやめたりしないよ」

何でもなかったかのようににっこりと軽く、明るく笑んだ。  
それから不機嫌な彼の周りに彼女はまとわりつくようになった。

夏の暑さもなくなった秋

葉は散って、積もる

「勇也」

何とか聞き出した彼の名前は清水<sup>しみず</sup> 勇也<sup>ゆうや</sup>、十六歳。ちなみに彼女は  
三島<sup>みしま</sup> 千歳<sup>ちとせ</sup>、十五歳だ。  
毎日のように二人はこの屋上に顔を出す。勇也はしつこく話しかけ  
てくる千歳うんざりとしていた。

「また来たのか！毎日毎日うざいな！」

「あれ？別に私は勇也に会いに来てるんじゃないよ、屋上が気に入ったから来てただけだよ」

その言葉に思わず顔を赤くする。新鮮な反応に千歳は笑う。少し肌寒くなったこの季節に二人は長袖一枚でここにいる。互いに何故この病院にいるのか知らないままで、屋上という共通のステージで話しているだけの関係だった。

「ふん、どっちにしろくん！」

「いや！私、勇也と話すの楽しみなんだもん！」

また赤面。先程の言葉と少し矛盾が生じることに彼は気付いていない。

人を煙たがる口調をするが、人付き合いが苦手なだけのようだ。千歳は面白いなあっと内心で呟きながら彼の隣りに座る。

「ここは誰もいないね」

「だからいるんだよ。なのにお前が来るから…。台無しだ」

「だって…私もそういう所探してたんだもん」

初めて聞く彼女の真剣な呟きに目を丸くする。

病院に来る者は誰だって一回はそんなことを思う。だから不思議で

はなかった。だが、あの千歳がこんなことを言うのは珍しい。

「でも、勇也と二人でいるのは楽しいよ。ね？退院するまでずっと一緒に話そう？」

「……………嫌だって言っても来るんだろ？どーせ！」

もっちらん！と叫んで立つ。人が来る場所ではないため、ここにはちゃんとした柵がない。ぎりぎりの所に立ち、街を眺める。

「綺麗……」

「お前にはそんな言葉似合わないけどな」

「うるさいなあ！ねえ、私夜の風景見てみたい！」

「はあ！？」

思いきり面倒な顔をする勇也に頬を膨らませて反論する。

「なあんでそんな態度するかなあ！いいじゃん！夜の屋上に女の子と二人つきりだよ！どっきどっきじゃん！」

「お前と二人なんて逆にしらけるだけだ！」

「ひどーい！」

ねえねえと勇也の袖を引つ張り喚いていれば、結局負けるのはいつも決まって…。

「ああ、わあかったよ！じゃあ、今日の夜な」

「やったあ！勇也大好き！」

感動のあまり抱き付いた。

またまた赤面。千歳よりも年上のはずの勇也はすっかり彼女のペースにハマッてしまっている。

「馬鹿！抱き付くなっ！」

「じゃあ、今日の十二時にっごでねー！」

嬉しそうに微笑んで、彼女は病室に向かう。

そろそろ夕食の時間だ。姿がないと看護師に怒られてしまうのだ。

「勇也」

「あ？」

「ありがとね」

微かに聞き取れる声でお礼を言い、そのまま顔を向けずに行ってしまった。しばらくその場に残っていた勇也は大きく溜め息をついた。空は既に暗くなりかけて星が出始めていた。

「何やってんだか…俺」

人を避けてここにいるのに

人と親しくなっている気がする

互いに人がいない場所を求めて

屋上を見つけた

一人になりたかったはずなのに

互いにいることがとても楽しいと感じてしまうことがすごく不思議だった

十二時。病院の明かりもほとんど無く、空は綺麗に星が耀いている。見回りが通りすぎた後にこっそりと抜け出てきた勇也はその景色に一瞬目を奪われる。彼はこの病院に来てから三ヶ月たとうとしている。こんな景色を眺めるのは本当に久々だったのだ。

「ある意味あいつに感謝かな？」

けれど君は

約束の場所へ

約束の時間に

来なかった

## 出逢い（後書き）

連載物です。どこまで長くなるかはわかりませんが、切なく純粹な優しい恋愛小説にするつもりでいます。もしよかったら最後までお付き合いして下さい。

少し勉強不足なところがあるかも知れませんが、突っ込まずに懐の深い心持ちで読んで下さい。

## 退院

彼女があの夜来れなかった

どうしてその時気付かなかったんだろう

あの約束の夜から既に三日。そして、千歳が屋上に来なくなってから三日。勇也は少し気になり始めた。あの夜来れなかったことを気にしているのかもしれない。それが、もしかしたら…。

「一体どうしたんだよ」

病室を調べようと思えばできる。だが、そんなこととして彼女の病気を知ってしまうことはいけないような気がした。

今まで一緒に話していて一度も病気について触れなかったわけではない。

「あの時…突っ込まれたくない顔してたからなあ」

いつも笑顔でいる千歳があの時だけ異なった雰囲気を出していた。それがわかって何も言えなくなったのだ。そして、今もそれによって動けないでいる。

「……………大丈夫なのかな？」

毎日毎日顔を出していた彼女。それが突然なくなるとなんだか淋しさが残る。深く溜め息をついて、入口に視線を送る。

「……………ん？」

「久々あ…勇也」

恐る恐るそこから顔を覗かせていたのは三日ぶりの千歳。そろそろとそこから彼の所に近付いた。やはり約束のことを気にしているのか、すごく泣きそうな顔をしている。目の前まで歩いて来たらその場に座り込み、頭を下げた。

「ごめん！約束破って！」

「別に…。何か事情があったんだろ？そんなに怒ってないよ」

「嘘だあ！だっていつもはそんなに優しい言葉言ってくれないもん  
！」

「それどういう意味だよ！許してもらおう気ないなてめー！」

「きゃー！ごめんなさい！」

いつものようなやり取りにやっと安心したのか、彼女の顔に笑顔が戻る。勇也も内心で安堵した。別に体調が悪そうではないから。

「ね？じゃあ、今度こそ二人で星見よう？」

「え？」

「私…勇也と二人で見たいの」

必死に頼む彼女の姿に結局勇也は顔を縦に振るしかなかった。

「しょうがないなあ。今度は絶対だぞ？」

「本当！ありがとう！」

そして、やっぱり彼女は抱き付く。未だに彼女の行動に慣れない勇也はいつもいつも戸惑い、顔を赤くする。

「へへ、勇也は可愛いなあ」

「う、うるさい！早く離れるよ！」

仕方なく身体を離して、千歳はつまんなそうに首を傾げる。彼女の最大の楽しみをもう少しやりたかったようだ。

「意地悪……」

「それはお前の行動だろっ！」

力いっぱい否定。

二人はまた元の関係に戻った。

友達、仲間、恋人……

そのどれでもない

関係

十二時。勇也は屋上に登ると先に来ていた千歳が笑顔で出迎えた。今日も幸い天気はよく、星がくつきりと見えた。

「綺麗…」

「だからお前には似合わないって」

「何よお！本当に綺麗なんだからいいじゃん！」

やっぱり二人は夜でもこんな調子。

ふと、何を思ったか黙る。じつと勇也を見つめる。

「勇也はそろそろ退院かな？」

「あ？何だよいきなり！」

「だって初めに会った時よりもすごく元気そうだから…」

確かにそろそろ医者が言った時期だけどと思案する。

「ねえ、どっちが早く退院できるか勝負しよう！」

「はあ！？何なんだよいきなり！」

「早く退院した方の言うことを一つ聞くっていつのは？」

楽しそうに提案する千歳の言葉に反応は変わる。この様子だと勇也の方が普通に退院しそうだと思ったからである。別に千歳に何かやらせたいわけではないが、そんな特権を持つのも悪くはないと思った。

「よし、その賭けのつた！」

「やった！」

散らばった小さな輝き。黒く支配された夜の世界には人々が感動する淡い輝きがある。それが見たくて千歳は勇也とここにいる。だが、本当にそれだけなのかはわからない。

「くしゅん！」

冬に入る前とは言え、夜はかなり冷える。千歳は薄着で出てきてしまったために、身体を冷やした。嘆息して勇也は自分が羽織っていた上着を差し出す。

「お前病人だろ？ちゃんと着とけて」

「へへ、ありがとう」

素直に受け取り服を着るとそれはやはりぶかぶか。長い袖を面白そうに振ってみる。

「うーん、やっぱり男の子だなあ。大きい」

「それでお前にぴったりだったら俺泣くぞ」

「ははは！そうだね！」

二人はしばらく静かな夜の世界で会話を楽しんだ。

自分がいる病室よりも小さな空間。勇也はそこがあまり好きではなかった。母親と二人でそこに腰掛け、軽く横になるための細いベットやカルテが置かれた机などを眺める。

「どうですか？先生」

「そうですね。もういいでしょう。もう二日ほど入院してもらって、様子を見た

ら退院してもらっても大丈夫ですよ」

「え？」

「本当ですか！良かったわねえ、勇也」

「あ、うん」

あつけない退院。突然そう言われると彼は複雑な心情となった。自分でもどうしてそう思うのかわからなかった。早く学校に行きたいと毎日思っていたのに。

「俺…明後日退院できるらしい」

またいつものように屋上に来ていた千歳に言った。彼女は勇也の退院に素直に喜んだ。

「そうなの？おめでとう！ってことは、私負けちゃったのか…」

少し残念というように溜め息をつく。

「何がお望みですか？御主人様」

「キモい…」

「やっぱ?」

「んー、まだ考えてないから思い付いたら言っよ」

「退院してもお見舞い来てくれる?」

「どうしよっかなあ」

いじけて頬を膨らませる。その姿をもつ毎日は見れないのだなあ  
と何となく思う。

「気が向いたらその不細工な顔見に来てやるよ」

「ひどーい!馬鹿!」

そして僕は彼女をここに残して

屋上から姿を消した

## 退院（後書き）

二話目です。ここで勇也が一体何のために入院していたのかが気になると思いますが、あまり気にするようなものではありません。おそらく怪我で入院しました。

次では勇也の学校生活です。千歳の見舞いシーンなどで終わると思います。

励ましのお言葉、感想などをお待ちしております。

## 見舞い

そして僕は元の生活に戻った

彼女をあつ白い病院に残して

「よ！退院したんだな！清水」

勇也は久々の学校に登校してきた。慣れたはずの制服は馴染まず、校舎を見るのは何故か新鮮だった。声をかけてきたのはおそらくクラスメイトの男子。  
勇也はぎこちなく笑って挨拶をした。

『なあに変な顔してんの？緊張したって無意味だよ！』

いないはずの彼女の声が聞こえたような気がした。見渡してもやはりいない。ただの幻聴だったようだ。  
学校でも千歳に振り回されているような気がして苦笑した。彼女で

あつて彼女ではない言葉のお陰で勇也はその日自然にクラスメイトに接することができた。

「にしても残念だなお前。修学旅行行けなくて」

「ああ、そんなんあつたっけ？」

学校のことを教えに来てくれる者はほとんどいなくて、勇也は状況が理解できていなかった。彼が病院で一人になりたかつた理由はこれだった。誰も自分の見舞いに来てくれない。そんな病室にいても逆に辛いだけだと、そう思つてしまった。そして、屋上に…。

「あいつ…どうしてるかなあ？」

また屋上にいるんだろうか…。そう、思いながら窓の外を見つめる。授業の内容はそれでも勉強を少しはしていただけあつてまだ理解はできた。友達も以前と変わらず馬鹿やつて笑っている。だけど、どこか物足りない。

理解できない自分に更に悩む。一体何が不満なのか。

「あいつって誰のことだ？」

「あ？いや、同じ病院にいた奴のことだけど？」

「もしかして女か？」

「確かにあいつは性別女だけど……」

「ひゅー！ついにお前にも春がきたのか！」

「はあ！？そんなんじゃねえよ！」

賑やかな空間に戻った。それは嬉しい反面苦しい。また上辺だけの付き合いが始まると、そう思ってしまうからだ。彼にとって入院は身体に傷がついたただけではなく、心に傷を負ってしまったようだ。もう、痛い所はないはずなのに苦しい。

僕は勝手な思いで皆の存在を否定した

だけど、否定できなかった存在が…君だったんだ

勇也は学校帰りに家とは違う方向へ足を進めた。一人で歩く道のは孤独というより楽しみ。決して静かではない道を気にすることなく、逆にその音を楽しみながら歩く。

「早く行かねーとな」

陽が沈みそうなのに気付き、走り出す。早く行かねば屋上を離れてしまう。病み上がりだということを忘れて全力疾走している。

「よ！やっぱりいたな！」

「勇也！」

彼の姿を見て立ち上がる千歳。クラスの女子を見た後だからか、彼女がかなり細く見えた。小柄だとは思ってはいたが、異様な細さを今では感じる。

「本当に来てくれたんだ！」

「はは！予想以上に不細工な顔してたな！」

「何それえ！ひどーい！」

足も腕も腰も肩も…全てが折れそうなくらい細く、痛々しい。こんなに痩せてたんだ…と内心で思いながらも表情は穏やかで、千歳は気付く気配がなかった。

「今日、久々に学校行ったよ」

「本当！？皆元気そうだった？」

「ああ。少し、残酷なくらいな」

儂く笑んだ彼が思っていることを悟ったのか、千歳は同じように笑った。無言で何もしてはくれないが、聞かずに傍にいてくれることが勇也は嬉しかった。

「あ、そういえばお願い考えてきた？」

「あ、忘れてた！」

「もお！別に期限は決めてないけど、早く言ってくれないと何となく怖いじゃん！」

にやりと意地悪い笑みを向けて勇也はぶつぶつと聞き取れない声量で呟き始めた。千歳は少し顔を青くして慌てる。

「ちょ！何よその顔！」

「ふふふふ」

「気持ち悪いからやめてよ！」

珍しく自分が振り回していることに快感を覚えたのか、なかなかやめようとしない。その内彼女はいじけてあらぬ方へ身体を向けた。

「何よ！そんなことしてるならお願い聞いてあげない！」

「ああ！悪かった！もうしないから」

彼女は顔だけ勇也の方を向いてくりつとした丸い瞳を上目にさせる。

「本当？」

「あ、ああ」

慣れないその表情に思わず心臓が早くなる。ぎこちない表情でそれに気付いたのか千歳は肩を震わせて笑った。

「本当、勇也はあきないなあ！」

「！？お前こそ人で遊ぶなよ！」

「だってえ！可愛いんだもん！」

「嬉しくねえよー！」

こうしてこの日二人が会話をしたのはこの夕方の時間だけ。

互いにとっても大切に

とても必要な時間

## 見舞い（後書き）

三話目です。今回は少し短めの話でした。学校、病院少しずつ二人の行動範囲が広くなります。

少しこの話の終わり方をまだ悩んでいます。なりゆきに任せてしまいかもれません。もしよかったら最後までお付き合いして下さい。

三亜野雪子

## 過ち

そして僕はあの場所を

汚してしまった

学校に登校し始めて一週間。やっと馴染み始めた勇也はストレスも感じなくなった。友達とも変わらぬ関係を保ち、授業も何とかなった。ただ、唯一困ったのは体育だった。ずっと休んでいたせいで体力がなくなっていた。

「くそう、たったこれだけの走りで息が上がるなんて…」

「無理すんなよ！体力なんていつかつくだろ！」

汗だくになりながら教室に戻った。もうすぐ冬。教室の中でもひんやりとした空気が彼の頬を滑る。窓から見える木にはほとんど葉はなく、あるとしても今にも落ちそうな程弱々しい。

その冷たい空気が彼の汗を引かせる。このままでは風邪をひく気がして汗を拭いた。

「次なんだっけー？」

「数学だろ。あ、宿題忘れた！」

「ばっかじゃん！俺はやってきたぜ」

「見せろおー！」

数学のノートを奪われそうになって必死に防戦する。

「お前、数学得意だろ！このぐらいの問題五分で解け！」

「解けることはできても書く時間がねーよ！」

「うわ！その自信がムカつく！絶対見せねえ！」

更に行く戦い。それに終止符をつけたのは教室の扉を開けた先生だった。

「ああ！来ちゃった！」

「残念だったな！」

互いに息を荒くしながら睨み合う。こんなことで何を馬鹿なことをしているんだらうと自分で思ってしまった。大体こんなことやるよ  
うな奴だったかなあと自分の過去の行動を考えた。  
結果あまり覚えてなかった。だが、やっぱり前よりも冗談が通じる  
奴になった気がして微笑む。原因はおそらく彼女だらうから。

「あいつは今、屋上なのかな？」

誰にも聞かれないように小さく呟いた。勇也は退院してから欠かさ  
ずに千歳の見舞いに行っている。やはりいつも屋上にいて、笑顔で  
話してくる。

「ねえねえ、勇也君も今日皆で遊ばない？」

「え？何の話？」

昼休みに入り、ご飯も食べ終わった時に突然、数人の女子に誘われ  
焦る。話を聞いていなかったのもあるが、よっぽどのがないこと  
話しかけられることがないからだ。  
見れば後ろの方には男子も同じ人数でいた。自分一人じゃないこと  
に少しだけほっとする。

「あのね、このメンバーでカラオケ行こうかなあって話してたの」

「あ、ごめん。今日も俺病院行くから」

「え！お前まだ完治してなかったのか！あんなに体育平然とやってたのに！」

「違う！見舞いに行くんだよ。知り合いがいるから」

そっかあと残念そうに彼女達は諦めてくれた。

「よー」

「よー！どっ？学校は」

「まあまあ」

荷物をその場に置いて千歳の方へ歩み寄る。最近はずごく早く陽が沈む。もう空には星が出始めている。

「ねえ、勇也の誕生日ってもうすぐだよね！」

「へ？よく知ってるな。確かに丁度一週間後」

「だよー！じゃあ、その日にびっくりをプレゼントしてあげる」

子供のようにはしゃぐ彼女に勇也もつられて笑う。

自分がこんな性格になったのは彼女のせいだと確信して。

「じゃあ、楽しみしてやるよ」

「何か偉そうだなあ」

「ありがとうございます。千歳様」

「よろしく」

僕らの関係は続く

互いにどんな存在なのか

気にすることもなく

休み明けのその日。帰り支度をしていた勇也はこれから会いに行く

千歳を思い浮かべながらバックの金具を止めた。もうすぐ勇也の誕生日。千歳の言葉が気になるのかその日が待ち遠しかった。

「勇也君。今日もお見舞い行くの？」

「あ、うん」

この前の女子がまた話しかけてきた。千歳以外の女子には全く免疫のない勇也はこういった機会があることがとても不思議に思っていた。今回も彼女達から話しかけてきたので驚愕で声が変わった。

「ねえ、私達も行っちゃ駄目かな？」

「勇也君の知り合いの人見てみたいし！」

「知らない私達でも行けばその人が喜ぶかなあって思ったんだけど」

勇也は少し思案する。

連れていくということはあるの屋上にこの女子が上がることに。全く知らないこの三人を千歳は笑って迎えるだろうか。そう、悩んでも出てこない答えを悩み続けた。

「う、うーん。わかった」

「本当？ありがとう」

勇也は深く考えずに思わず了解してしまった。女子三人という慣れないメンバーで病院に向かう。そのせいかあまり千歳の顔が浮かばない。喜ぶのが少し不安になりながらも病院に入った。

「病室に行かないの？」

「いつも病室じゃなくて屋上にいるんだ」

屋上に上ればいつも彼女の笑顔が勇也を迎えてくれた。そう、いつもなら。やはり屋上にいた千歳は上がってきた勇也を見つけて立ち上がり、表情を固くした。

「こんにちは。私達勇也君のクラスメイトなんです」

「千歳…突然悪いな。お見舞いに来たいって言ってきたから、つ…

……………い」

思いがけない表情をされて勇也の言葉は途中で止まる。その顔は今まで一度しか見たことなかった。泣いてはいないが、傷ついたその顔。

「千歳…？」

「え？あ、ううん。何でもない。ありがとう」

すぐに元の顔に戻った千歳に内心安堵して、勇也は適当に話した後三人を帰らせた。

「……………」

痛い程無言が続いた。気まずくて勇也はかすれた声音で話しかける。

「ごめん、やっぱり不謹慎だったか？」

「そうじゃない」

短い返事はすごく冷たくて顔が見れなかった。またあの表情をしているんじゃないかと思っ

「勇也にとってこの場所は…他の人が来てもいいんだね」

震える声に振り返る。一度も見たことない彼女の泣き顔がそこにはあった。涙を流しながら儂く笑って彼女はそのまま走って行ってしまった。

勇也はやっと気付いた。ここは他の人に教えてはいけない場所だった。お互いに誰もいない所を探してここを見つけた。だから二人

でいた。そのことをすっかり忘れていた。  
ここは二人だけの場所だったことを。

それから彼女は

屋上から姿を消した

## 過ち（後書き）

四話目です。今回は少し長めにしてみました。つと言ってもたった五百文字ですが。千歳と勇也の初めての喧嘩？かな。次は勇也の誕生日です。

ここまで読んでくれて感激です。もし良かったらこの後も読んで下さると嬉しいです。

三亜野雪子

## 誕生日

それから君は

屋上に来なくなっただ

勇也は一人で暗くなる空を見つめている。ここは病院の屋上。昨日のことを千歳にちゃんと謝ろうと決意してきたが、そこに彼女の姿はなかった。仕方なく面接時間ぎりぎりまでいることにした。

「来ないか…」

約束をして来なかった時よりも辛かった。勇也の頭にはあの泣き顔しか浮かばない。今は後悔という感情だけが勇也を支配する。星も出て、陽が落ちた時。勇也は諦めて今日は帰った。その姿を窓からこっそり覗く者がいたことに気付かずに。

次第に元気はなくなっていく。あの日からもう三日。それでもおそらく彼女は屋上にいないだろう。そう予想しながらも階段を上る。想像通り。殺風景なそこには誰もいない。

「忘れたのかな？」

寂しそうに呟いたその言葉。

明日は勇也の誕生日。彼女は彼にびっくりをプレゼントするという約束をした。この出来事で忘れてしまったのでは、と不安になった。誰もいない屋上に一人。これは勇也が入院していた時に願っていたこと。だけど、それが今では辛い。

「謝るからさあ……。お願いだから来てくれよ。千歳」

寂しくて、悲しくて、立ち尽くす。

そして君は

約束の日

暗い顔で勇也は登校する。今日は勇也の誕生日。それを知っている者はおそらく学校ではない。聞いてきたのは千歳だけで、教えたのも彼女だけだ。だが、その教えた人物に会えない。

「今日：会えるのかなあ？」

何をもらえるかより、彼女に会えるだけでいいと心から思った。溜め息をつきながら校門を通る。

「勇也先輩。なあに朝から暗い顔してるんですか？今日は誕生日でしょ！もっと明るくいきましょう！」

「ああ…そうなんだけど。……………つて？」

顔を上げればそこには彼女。優しい微笑みを勇也に投げ掛ける制服姿の千歳。信じられない光景を見て、硬直する彼に千歳は思わず吹き出した。

「驚き過ぎでしょ！でも、これでプレゼントあげられた！」

「おま、何でここに！」

「許可もらったの。学校に行っていていいって。勇也は知らなかっただろうけど、私はこの学校の生徒なんだよ」

見慣れない彼女の制服姿はとてもよく似合っていた。こうして見ると彼女が高校生だと実感が湧いた。

「びつくり受け取った？」

覗き込むように顔を傾がせる彼女が可愛くて勇也は破顔した。物ではなく行動をプレゼントしてくれたのは彼女が初めてだった。

「ああ、ありがとう」

穏やかに述べたその言葉は心からのお礼で、心からの喜びだった。

その日

俺に最高のプレゼントをくれたんだ

「じゃあ、病院から学校に行ってるのか？」

「うん！退院したわけじゃないから」

朝の時間、二年の教室前の廊下で二人は会話をしている。千歳は勇也の一年下なので一年生だ。

「ひゅーひゅー！なあに見せびらかしてるんだよ！清水」

「だあかあ、そんなんじゃないって言ってるだろ！」

「一年の三島千歳です！よろしくお願いします！」

明るく挨拶すれば茶化していた男子は顔を赤く染める。千歳は瞬きを繰り返して勇也に耳打ちする。

「この人達…勇也よりもシャイなんだね」

「うーん、女に飢えてるんじゃない？」

「ぶ、何それえ！だからって挨拶しただけで赤くなる？」

元気に笑う彼女を見て、彼は思案する。  
シャイというよりも基本的に彼女がそこら辺にいない程可愛い顔を  
しているからではと思う。

「皆、可愛いなあ」

「おい、もしかしてそれって俺も入るのか？」

「当たり前じゃん！じゃあ、私そろそろ時間だから教室戻るね」

勇也と他の男子に手を振りながら彼女は一年の教室の方へ姿を消し  
ていった。

それをほんわかとした雰囲気で見送る男子一同。

「いいなあ千歳ちゃん！」

「俺、狙っちゃおうかなあ」

「確かに千歳は可愛いと思うけど、恋とか興味なさそうだぞ。あいつ」

今まで話をってきて好き人や恋愛について話したことなど一度もな  
かった。

「うわあ！千歳だって！呼び捨てだぜ！」

「何か羨ましいぜ」

ノリについていけない勇也は深く溜め息をついて教室に入った。

この時間はいつも千歳と会うことを考えていた。屋上に会えば何を話そうかと考えることが楽しみだった。

だけど、今は千歳がこの学校いる。

「本当、一番嬉しい誕生日プレゼントだな」

学校が終わり、鞆を持って下校する。気付けば前にいるのは細い身体の彼女。

「千歳」

「あ、勇也！」

「お前の誕生日っていつだ？」

「あ、何々？何かくれんの？私はね、今から二週間後かな？」

「近いなあ。何が欲しい？」

千歳は視線を流して、ぼつりと小さく呟いた。

「愛しいを……」

「え？」

「ううん。何でもない！勇也がくれるものならなんだっていいよ！」

「そ…うか？」

病院まで彼女を見送った勇也は帰り道、悩みながらも歩く。  
今まで深く考えたことなかった。千歳との関係。

「愛しい…か。俺にどうしろってんだよ。千歳」

自分の気持ちもわからない

僕が出した答えは

やっぱり…

## 誕生日（後書き）

五話目です。勇也のプレゼントが出ましたね。次は千歳の誕生日かな？一話の話があまり長くないのでなかなか進みませんが、ゆっくりよこの二人のペースで近づけていこうと思います。落ち着きすぎていて苦手の人も多そうな作品ですが、これからよかったです！

三亜野雪子

## 永遠

そして僕と君の関係は

変化を告げる

冷たい空気が吹く。

たった二ヶ月で外の風景はがらりと変わる。紅葉が美しかった木々は枝だけを残して寂しく立ち、あれだけ明るかった太陽も心なしか元気がない。暖かかった風も身体を冷やす冷たいものに。

季節は冬を示している。

ちらりと授業中に窓の外を見やるとそこには千歳の姿。ぼーと体操着姿の同級生を見つめている。

やっぱり体育は見学だよな。と確認する。高校に入ってすぐに入院してしまった千歳はなんとか親と医師に許可をもらい、学校に登校してきた。

「まさか…俺のため？」

まさかな。と苦笑して黒板の方へ向き直る。並べられた文字はこれからのどのくらい役に立つものなのか。

漢文、古文、現代文、足算、引算、関数、世界史、日本史、公民、生物、物理、化学…。

やりたいのかも使うのかもわからないものをただただ無心に学ぶ。増えていくのは書き溜めたノートと印象に残った知識。

「どれもピンとこないんだよな」

勉強をしても、進路を考えても、どれもピンとこない。それはどれにも興味が起きていないから。授業とは別のことを頭に浮かべて、誰にも聞こえない声を出した。

「あと、二日」

登下校を一緒にするようになった二人は今日も一緒に下校する。千歳が入院している病院に向かって。

「勉強追いついてるか？」

「うーん…微妙かなあ。でも、赤点にはならないくらいにはできる

よ！」

病院まで行ったらそこで別れず二人はそのまま屋上に行く。どちらも部活はやっていないため、まだ時間に余裕があった。まだ四時くらいだと言うのに陽は沈みかけている。

「友達できたのか？」

「見くびらないですよ！勇也と違って私は愛想がいいんです！」

「うっわ！めっちゃ憎たらしいなあ」

上手くいっている。それが自分のことのように嬉しかった。彼女が学校に来て、自分の話して、友達と遊んで、授業に出て、普通の暮らしが少しでもできている。それは勇也も味わったことのあるからわかった。本当にとっても嬉しいこと。

「二日後…」

「えっ？」

「楽しみにしてるよ。お前に負けないくらいのプレゼントやるよ！」

鞆を担いで、言い捨てた。

彼女の顔を最後まで見ずに。

そしてその日

「勇也！いつになったらくれるの！」

「屋上行ったらだよ！」

「もぉ！勿体ぶらないですよ！」

待ち切れないという様子で急かす千歳の頬を撫でて、微笑する。思いがけない行動に千歳は口を止めた。

「一番の場所で一番のプレゼントを…やりたいだろ？」

「……………うん」

珍しく今日は勇也が千歳より一枚上手だ。握られた手は温かさを感じて、千歳の顔がほんのりと赤く染まる。そんなことに何も気付か

ない勇也はせつせと屋上に向かった。  
既に陽は半分ほど沈んでいる。冷たい風を感じて、勇也は自分のコートを彼女に羽織らせた。

「まさかこれが…?」

「んなわけねーだろ!」

「だよね!あー、びっくりしたあ!」

突拍子もない彼女の言葉に呆れながらも屋上の中心に歩む。白い床は足音を奏でて、白い建物は今日は舞台。高鳴る心臓は何故か心地好い。

「お前に関係をプレゼントだ」

「関係……………?」

くるりと身体をひるがえして彼女を見つめる。きよんとした顔はとても可愛くて。

「永遠の関係を…。どっちがいい?親友と恋人」

それはどちらでもいいというほど。

永遠の関係。

変わることはない。

永遠の絆。

「俺は…どっちでもいい」

初めて見た。彼女が顔を赤く染めるのを。勇也は何か言うまでじっと待った。

彼女は少し迷い、今までで一番可愛い笑顔を勇也に向けて…。

「なら、私は永遠の恋人がいい！」

友達でも親友でも恋人でもない

二人の関係

細い彼女の身体を優しく抱き締めて、勇也は同じくらい顔を赤くして呟いた。

「受け取ったか？愛しいを」

「な、聞こえてたの！」

「俺の耳なめんなよ！」

苦笑にも似た顔で千歳は頷いた。

「うん！本当に一番嬉しいプレゼントをもらったよ！」

「なら、よかった！」

そして二人はその日、陽が完全に沈むまで抱き合っていた。

翌日、朝の時間に二人はいつも通り話していた。

「千歳ちゃん！おはよう！」

「おはようございます」

「今日も元気だね！時には俺達と話そうよ！」

軽いノリに千歳は愛想笑いして、流した。勇也も苦笑してその男子を手で制止した。

「言い忘れたけど、俺ら付き合いだしたから」

「えー！」

「だからもう構うなよ！」

「え？でも、ここの人勇也みたいに楽しいから構ってもらって嬉しいよ」

「お前なあ」

付き合っても変わらない二人。だからこそ永遠を約束できる。

僕らは互いを求めて

永遠を誓った

永遠（後書き）

第六話です。やっと付き合いました。長かったですねえ。これから少し暗い話になります。一応中間地点くらいにきたのかな？できる限り読みやすく書いていきたいと思っています。最後までお付き合いして下さいたら光栄です。

三亜野雪子

デート

僕は知ってしまった

君の病気を

「千歳」

呼ばれて振り返る彼女の顔が何故か新鮮に思えた。制服姿にも慣れてきたが、そろそろ冬休みだ。

「勇也。テストどうだった？」

「まあ、悪くはない」

元々頭は悪くない勇也は今回もそこまで悪い結果は出さなかったらしい。

「ねえ、私ねやってみたいことがあるの！」

「あ？何だ？」

付き合い出してからの千歳は更に可愛くなったと思った。いや、可愛いというより綺麗と思うほど整った笑みをする。

「クリスマスデート」

「で…」

デートという聞き慣れない言葉に勇也は顔を赤くした。やはり千歳はその顔を可愛いと叫んで茶化す。

「だめ…？」

上目遣い&甘い声。どこでそんなものを覚えたのか、と内心呆れながらもその攻撃を食らう。くらくらする頭を理性で持ち堪えて、答えた。

「十二月二十四日。だな」

「いいの!？」

喜んだ顔がまた可愛い。と勇也は思った。

千歳の頬に優しく触れてできる限り静かな声音で言った。

「だけど、代わりに…もらうけど」

視線は千歳の唇。何を言いたいのかすぐに理解できた。初めてのデートで何もしないでいるほど彼は大人ではない。今度は千歳が顔を赤くして身を引いた。

「え、エッチ」

「おい!それはねえだろ！」

「変態！」

「ほお?好きな奴にキスしたいと思って何が悪い!」

きっぱりと言われたことが衝撃だったのか、今度は全身が赤くなる。そつえばはつきりと好きと言ったことなかったな、と今ごろ思い出す。

「ば…馬鹿」

「それとも今もらっても俺はいいけど？」

「い、いや！やるならクリスマスがいい！」

「なら決まり！」

しまったというように口を押さえる彼女に不敵に笑んだ。

そしてクリスマスの日待ち合わせをして、その日は別れた。

十二月二十四日、クリスマスイヴ。二人は街中の広場で待ち合わせをする。時間より少し遅れて来たのは千歳。いつもとは違う私服の彼女。

「ごめん！」

「走るなよ。身体に悪いだろ」

気にしていない様子に安心したのか、彼女の顔はすぐに笑顔になる。勇也は手袋も何もつけてない彼女の手を握る。

「ほら、行こうぜ」

「え…あ、うん」

指がからまる。恋人繋ぎだと千歳は心の中で呟いた。

一方勇也は白くてひらひらとした天使のようなワンピース姿の千歳にくらくらだ。

「ねえ…」

「ん？」

いくつか言っていた所を回り、二人は休憩とお昼のためにファミレスに入った。そこで、出された水を飲む勇也に千歳はぼつりと。

「今日…遅くまでいようね」

「っ、ごぼ、ぐ、げほ」

今日は初めてのデート。そのせいか千歳の様子がおかしい。ここまで素直な台詞を吐くことは今までになかった。

「勇也？」

「ごめん。ちよっときた…」

もちろん水の方のきたではなく、予想しなかった彼女の言葉にきたのだ。

「もしかして、またエッチなこと考えてる？」

「んなわけないだろ！てか、またってなんだ！またって！」

「この前も…。き、き、き、」

「言えないなら切り出すな！だから、好きな女に触れたいと思って何がいけないんだよ！」

「こ、こんな所で変なこと言わないでよ！」

やっと彼女らしい反応に勇也は意地悪く笑う。

「忘れてるだろ？俺、意地悪なんだぜ」

「そうね。最初シカトこいた人だもんね」

言い合って笑う。最初から変わらない二人の関係。告白しなかっただけで、二人は恋人と変わらない。

「次は？」

「ツリー見たい」

「じゃあ、あそこだな」

勇也は手を差し出した。千歳はその手を見つめて、握るのではなく腕に絡み付いた。

「なっ！」

「この方があつたかいんだもん！」

身体を固くする彼に気付いて千歳は微笑む。  
街の奥の奥。そこにこの日のために飾られている大きなクリスマスツリーがある。二人はそれに向かって歩く。

「もうすぐで陽が沈むね」

「あそこのツリーは暗いと綺麗だぜ」

「本当？楽しみ」

初めてのデート

初めてのクリスマス

病院でも学校でもないこの場所で

僕らはやっと二人だけで歩いている

「綺麗」

辺りはすっかり暗くなって、周りには二人と同じ恋人同士がツリ―を見つめる。

「千歳」

「え…?」

千歳を優しく抱き寄せた勇也は静かに呟いた。

「愛してる」

「……馬鹿」

頬を染めながらも彼女は勇也を拒まずに優しく触れるだけのキスをした。  
妙に熱くなった身体はこの寒い中でも冷めず、見つめ合ったまま唇を離す。

「勇………也」

膝から力が抜ける。倒れる彼女を咄嗟に支えて勇也は地に膝をついた。

胸を押さえて苦しそうにする彼女。勇也は思わず叫んだ。

「千歳！何だ！？どうした？」

「　　っ、ゆ………や。で……」

息も出来ないほど苦しむ彼女が視線を送るのは自分の携帯。

「病院だな！待ってる！」

片手で力強く彼女を抱き抱えたまま、勇也はすぐさま病院に電話をして、千歳は救急車で運ばれた。

幸い、早く医者に診てもらったため発作はすぐに治まった。

「ごめんね、心配かけて」

「……………で？」

ゆっくりと低い声音で聞いた。今まで聞こうとしなかった彼女の病名。だけど、こんな苦しみ方を見たらもう聞かないわけにはいかない。彼はこれから彼女の一番身近な人物となるのだから。

「……………俺はもう部外者じゃねえぞ？」

「うん、わかってる…。私ね」

君は初めて僕に告げた

自分の病気は

先天性心臓病だと



## デート（後書き）

七話目です。やっと彼女の病名が明らかになりました。これから少し無茶な病気設定をしますが、どうか心を広くしてみてください。できる限り現実と同じ設定でいきますが。

次は病気について二人が語り合います。ここまで読んでくださっている皆さんに感謝して早めに更新したいと思っております。もし、よかったら感想及び評価お待ちしております。

三亜野雪子

## 本音

彼女にしかれた

人生のレール

「生まれた時から私は心臓病で、だけどそれに気付かなかった」

「あれ、雑音が聞こえて見つけやすいんじゃない」

「大体はね。だけど私のは心房中隔欠損症なの。あれは他のと比べて雑音が小さい。私は高校一年の五月。初めて発作を起こしたんだ」

それまでは何ともなかった。そう哀しそうに呟く彼女に胸が痛くて、勇也は黙って聞く。

「先天性心臓病、心房中隔欠損症。目の前は真っ暗になった。心臓病って聞いただけで、私は死んじゃうんじゃないかって」

「手術は？」

「あるよ。だけど私はまだできないの。体重がまだ少ないから」

手術は体力を使う。普通の人よりも細い身体をした千歳にはまだそれを行う体力がない。無理に体重を増やそうとすれば心臓に負担がかかり、腫れてしまうのだ。

「皆、私を不安にさせないために作った顔で作った言葉を吐いた。それがたまらなく嫌で、だから一人になれる所を探したの」

それがあの屋上

だけどそこにはすでに一人

「正直焦った。他には一人になれる所なかったから…」

「一人になりたかったのに、どうして俺に話しかけてきたんだ？」

「ただの好奇心。私と同じような顔をした人だったから」

話してみたら

嫌味を言う人で

だけどそれは偽りのない言葉

私を気遣う偽りの言葉ではなく

本当の言葉

「嬉しかった。たったあれだけのことが…。だって私には他にそう言ってくれる人がいなかったから」

「学校来たのは…何のためだったんだ？」

「ただ、純粹に勇也との時間を増やしたかっただけ。私はいついなくなるかわからないから…」

哀しく残酷な言葉に勇也は顔をしかめる。それに気付いたのか、千歳は口を閉ざした。発作が起きる度に死という恐怖が彼女を襲う。だからこそ、彼女は親や医師に願い出て高校に通った。

「……………何、平気な顔してるんだよ」

「え？」

「辛いなら泣けよ！俺の前で無理に顔を作るな！吐き出したいなら言えばいい！」

「何…言つて…るの？」

こわばる彼女の顔を腕で優しく包み込んだ。温もりが彼女を暖める。優しく、穏やかな声音を心掛けるが、勇也の声は震えていて。

「そう、無理をされる方が辛いんだぞ？心配かけたくないなら…泣けよ」

「馬鹿…。何で……………そんなに優しいのよ」

勇也の身体にしがみついて、彼女は嗚咽を吐き出した。溢れ出る涙は彼の服に吸われ、哀しみを写し出す彼女の背中は彼の手で和らげられた。

勇也も一緒に涙を流して今度ははっきりとした声で言った。

「当たり前だろ。好きな女なら誰だって…優しくなるんだよ」

愛し合う二人に与えたものは不安と哀しみ。だけど、それのお陰で二人は出会えた。それは残酷な喜劇。

泣いたせいかぐつすり眠ってしまった彼女に優しくキスをして、勇也は病室から出た。そこには彼女の母親が立っていた。

「貴方が勇也君ね」

「はい。初めまして」

丁寧に挨拶をすると、母親は辛そうに顔を歪ませた。

「病院に連れてきてくれてありがとう。あの子にもしものことがあったら…私」

「もしもなんて…とつくになってますよ。これ以上恐ろしいことなんて起きません」

きつぱりと、あまりにもはっきりと言ったものだから母親は不意に顔を硬直させた。

千歳の本音を聞いた。優しく、純粹で、残酷な本音。だけど、そんな状況に置かれていたらおそらく誰にだってよぎる事実。『死』という哀しい言葉。

「あいつには俺が希望を持たせませぬ。俺はあいつには元気になって欲しいから。死んで欲しくないから。生きる活力はいつも気持ちからなんだって教えてあげませぬ」

「うん、ありがとう」

病気を持つ子供の母親は子供と同じくらい辛いものなんだと思った。気が抜けたように泣きだした母親の背中をさすり、勇也は千歳の病室を見つめた。

一番辛いのは病気を持つ本人。それは誰にだってわかること。だからこそ本人が怖がらないように、哀しまないように嘘の笑顔で嘘の言葉を吐いていく。

「彼女のことを思うのなら、次からは不安な顔でいいから、本音を言っておいて下さい」

「どうして？これ以上あの娘に負担なんか」

「負担をあげないためにも……自分がこんなに心配してるんだって、言っておいて下さい。千歳はそれを望んでいるはずですから」

本当の言葉。それは少し重くて受け取りにくいけれど、嘘だらけの言葉の中でいたらどれが本物なのかわからなくなってしまう。千歳はそれが怖くて屋上に逃げだした。

少しだけだが、勇也と同じ理由で。

「あいつを支えられるのは近くにいる人だけなんですよ？」

この母親もどれだけ自分一人で悩んできたのだろうか。高校二年生

の幼い彼に言われた言葉でぼろぼろと涙を流して何度も頷いている。

守りたい

君を

君の人生を

死なせたくないんだ

そう、僕は思った

## 本音（後書き）

八話目です。先天性心臓病の心房中隔欠損症です。すみません、この心房中隔欠損症の読み方は私にはわかっていますので、ふりがなをつけることができませんでした。もし、知っている人は教えて下さい。

次くらいからちょっとだけ奥の深い話にする予定です。できるかは不安ですが……。

もし、この病気について知っていることがありましたら、教えてください。

感想及び評価お待ちしております。

三亜野雪子

## 夢

愛しいから

失いたくないから

一応ということで千歳は一週間病院で安静にすることになった。すぐどこかに行ってしまうこともあり、彼女は軟禁状態にされてしまった。もちろん、彼女はすごく不機嫌だ。それを宥めるように勇也は毎日病院に通いいろんな話をする。気をつかっていることが嫌なのか、最初は仏頂面だったが千歳は次第に笑顔になってゆく。

個室なので他の人がいっさいいない。二人っきりの空間は学校よりも少し魅力があった。あの屋上を思い出すねと笑って言った彼女に勇也も笑って頷いた。

十二月の終わり。外は見るからに冷たそうな色をしていた。だが、二人だけの会話は何よりも暖かくて、楽しかった。

「ごめんね。初めてのデートだったのに」

「まだ気にしてたのか。別にいいよ。俺は千歳と話せるだけでデートだから」

気遣うように咳かれたそれは真実で、千歳は嬉しそうに頬を染める。白い部屋、白いカーテン、寒い故に閉められた窓からはひんやりと冷たい空気が伝わってきて。あの発作から変わったことはなくて、二人は病気を気にすることなくいつも通りに話をする。

だけど、勇也は気付いていた。いつも通りに笑う彼女の顔に次第に希望がなくなっていることを。ふとした瞬間に見せる儂い表情が彼の胸を締めつける。

「不安？」

「え？………何が？」

戸惑ったように冷や汗をかいて、千歳は言った。顔を歪ませる彼に更に表情をこわばらせた。かすかな表情を見られたことに気付いて隠していた不安な顔を勇也に見せた。

「寂しいの。こんなに勇也が近くにいてこんなに楽しい時間がもう、そんなに過ごせないんだって思ったら」

吐きだした本音は本当に残酷なもので、彼の心を傷付けた。彼女は今、何の希望もない状態でここにいる。助かることを考えていない。ただ、この時間だけを楽しめればいい、と残された時間にすがりつ

くよづにして立っているだけだ。  
その事実が、予想していた事実が本人の口から言われると重く勇也の胸にのしかかる。

「馬鹿なこと言つなよ」

「勇也？」

泣いてはいけない。そう自分に言い聞かせて振り絞った声は震えていた。千歳は揺れる瞳を彼に向けて目を瞞る。泣いてはいない、だがその顔は確かに見えない涙を流していて。

「お前が諦めたら俺達は何もできないじゃないか。いくら周りが頑張っても、本人が頑張らないと何にもならないんだぞ！わかってるだろう？」

「そんなこと言っても、私には時間がないの！！」

不安で押し潰されそうな日々。だけど、今彼女の心を押し潰すのは彼の哀しそうな顔。

「今までずっと気付かずにきてしまったから……、私の生命はおそらくあと一年」

医師から言われたわけではない。だけど、母親の顔が、自分に接してくる看護師の顔が次第に雲つていくのを見ればすぐにわかった。その証拠に思い出を作りたと言ったらあっさりと学校に行くのを許してくれた。

自分の身体だからこそ、一番理解できた。発作の感覚はどんどん短くなっている。無理をすればすぐに、長く、苦しくなっていた。こんな状況でどうやって頑張れと？と、いつも思っていた。

「どうすればいいの？私は！身体はどんどん弱くなってるし、発作は苦しいし、体重は増えないし……。これじゃあ手術したくてもできないんだよ？」

自分が握るシーツをジッと見据えて、彼女は肩を震わせた。黙って聞いていた勇也はそっと、その手に自分の手を重ねる。

「夢を持てばいい」

「……………？」

言っている意味がよく理解できずに、彼女は顔を上げた。瞬きもしない彼の綺麗な瞳から流れる雫は白いシーツに後をつける。手から感じる温もりは彼女を締めつけていたものを少しだけ和らげた。

「一年後、今度は本当に夜遅くまでクリスマスを楽しんで」

静かに紡がれるその言葉を黙って聞いて、瞳を閉じる。

「もう少ししたら俺は卒業で、千歳は卒業式に俺のボタンを取りに来る」

「くす、自信過剰」

「俺は大学に入って、君は進路に向かって頑張る。少しだけ時間がなくなるけど、それでもあいた時間は二人だけで会って話をして」

「また、変なことするんでしょ？」

「夏休みや冬休みは二人だけで旅行に行つて」

「進路のことで大変じゃなかったっけ？」

「で、千歳も大学？」

「一応進学校に入ったらそのつもりじゃない？」

「なら、近い所受かってもらつて、一緒に住んで、俺は先に就職して」

「何でそうなるのよ。ってか、勇也就職できるの？」

「るっせ、で、千歳も大学卒業して」

彼女の額に自分の額をくっつけて勇也は一番穏やかな声音で最後の夢をささやいた。

「結婚するんだ」

彼女の目頭が熱くなった。諦めていた夢。大好きな人とのこれからの人生。咳かれて、見せられて、また……求めてしまった。

「夢……見たくなんかかった」

「どうして？」

「見て、それでも叶えられなかったらと思うと怖かったから」

「大丈夫。諦めないでいいよ」

彼女の顔を両手で上げて、破顔する。安心する自分にしか向けられないその顔に千歳は不思議な安心感に包まれた。

「大丈夫。千歳は手術が無事にできて、高校も大学を順調に卒業して、俺と結婚するんだ」

何の根拠もない言葉。

だけど、その言葉は嘘ではない。だけど、本当でもない。  
優しい予言。優しい予定。

都合のいい夢。

「千歳のお母さんと、この病院の医者と……。俺と、一緒に頑張ろう？自分自身の夢のために、な？」

君は僕が言った言葉に

素直に

頷いてくれた

愛しいから

失いたくないから

君には希望を持ってもらいたいんだ

## 夢（後書き）

九話目です。恋人同士が一度は必ず夢を見る結婚。さて、二人はできるのでしょうか。限られた時間の中で。この題名自体がなんだか切ないものですが、だからといって哀しい終わり方をするとはいえません。

少ししかない希望にすがって二人は頑張っていけます。最後までその頑張りを見守って頂けると嬉しいです。

三亜野雪子

## 願い事

まだ使っていないかった願い事は

君のために

三学期が始まった。無事に退院した千歳と変わらず登校する勇也。発作の件で更に絆を深くした二人は周りが憧れるほどお似合いのカップルとして噂の的となった。冷え込む一月の風は千歳の身体には悪いと思い、勇也は持参してきたコートを彼女に羽織らせた。少し戸惑いながらもその行為に微笑む。

「三学期か……。入院していたからかあんま実感ねえな」

「そうだねえ。面白い行事なんか無いし。ねえ、今度学校デートしない？」

「お前、何でもかんでもデートってつければ気が済むのか？」

「勇也と一緒になら何でもデートなんですよ？私は学校でちょっと違う気分を味わってみたいの。だめ？」

自分と二人きりでいたいという彼女の言葉を拒否する理由は何もない。勇也は苦笑に似た表情を千歳に向けて、返事の代わりに溜め息をついた。

「お前には敵わないな」

「彼女に勝とうなんて百年早いよ、勇也。じゃあ、今日の放課後待ってるから」

「って、今日かよっ！」

当たり前でしょと叫ぶ彼女を遠目に、更に溜め息を一つ。最近彼女はこういったわがままを何度か言う。前にもないとは言いい切れないが、明らかに増えてきている。

それに思いあたるフシを考えて、目を細める。病気を知った彼は少からず彼女の行動に敏感になっていく。

「デート……………か。それよりも何よりも大切なものがあるだろう？」

小さく放った言葉は誰の耳にも届くことはなく、ただ彼の心に響いただけだった。

放課後、千歳の教室に顔を出した勇也は流れ出てくる生徒を見ずこして、彼女を探す。教室の角の席に腰をかけた千歳はぼーっと黒板を眺めている。誰もそれに気に止める者はいなく、全員すぐに教室から消えてしまった。

勇也の存在に気付いていないのか、千歳は未だにぴくりとも動かない。

「学校なんて……上辺だけの馴れ合いしかないんだね」

何を思っただか、淋しそうに言った自分の言葉に自嘲した。綺麗な長いまつげを揺らして、目を閉じる。頭の中に何を思い浮かべているのか、それは勇也にもわからない。うつすらと滲み出る涙はそのまま頬を伝い、膝に落ちる。

「上辺じゃない扱いをしてくれたのは……勇也だけだった」

思いがけないことに目を見開く。ゆっくりと開かれた彼女の瞳は不安そうに揺れて、溜まっている涙を落とす。

「大切な者を、見つけなければよかった」

あの時屋上で二人が会わなければ一体どのような人生を送っていたのか。そんな仮想を考えてもわかりはしない。だが、一つだけ言えるのは『愛』と言う感情を互いに持つことはなかったということだ。勇也は音も立てずに教室に入る。それに気付いてか、彼女の瞳はまた閉じられる。

「そうすれば、哀しむことも苦しむことも、いざという時…ないのに」

「じゃあ、千歳は俺に会いたくなかったのか？」

濡れた頬を指で拭う勇也。少しだけ顔を上げて、彼女は首を振る。

「会えてよかった。勇也がいなかったら私、夢を持つことなんてできなかつたから」

「なら、何でそんな哀しいこと言うんだ？」

濡れたまつげを上げて、じっと彼を見つめる。同じくらい哀しそうな表情を向ける勇也は瞬きもせず見返す。頬から伝わる体温は彼女には心地好くて。感じる視線は身体を火照らせた。

「ごめんなさい。頑張るって約束したばっかなのに…。いつも、弱気になるの」

「なればいい。不安なら泣いて、辛いなら愚痴吐いて、悔しいなら怒鳴り散らせればいい。千歳は今まで強敵を前に一人で強がっていた。だけど、今は俺がいる。一人じゃないんだ。だから、強がることないし、一人で泣く必要もない。全て俺にぶつければいい」

「そんなことできない。勇也は悪くないもん。私の苛立ちに付き合う必要なんかない」

視線をそらす彼女に嘆息を漏らして、彼女の熱い顔を上に向かせた。そらされていた視線は不意に合って、彼女の動きを止めさせた。唇に感じた柔らかくて、温かなものはすぐに離れて。次見た時は千歳の顔は真っ赤。

「じゃあ、先に退院した俺が持つ特権である願い事。気持ちが悪くなるなら関係がなくても俺に全てぶつけること。いいか？」

「どっして…」

「俺は千歳の笑顔が見れば幸せになれるから」

ささやかれた言葉は彼女の心臓を鳴らした。新たに頬を伝う涙は今度は哀しみのものではなく、喜びに彩られた綺麗な水。勇也が感じていたもの。それはいつ訪れるかわからない死に対しての拭いきれない彼女の不安。わがままは思い出を増やすため。その行動の意味

を正確に読み取って彼はまた彼女の心を救う。

「  
ありがとう」

どうしても守りたいものは

それは、僕の大切な

彼女です

## 願い亭（後書き）

十話目です。いつの間にもここまで書いたのですね。一話一話が短いのであつという間な感じがします。そろそろ後半にさしかかりたいと思います。二人の行く末をどうか見守って下さい。

三亜野雪子

誓い

彼女との

甘い誓い

あのデートから一回も外で遊ばなくなった二人は、土曜にも関わらず今日も病院で話をする。千歳の母親も今日は見舞にきていろいろと世話を焼いていた。

最近少しずつ本音を吐きながら接しているせいも、千歳も母親に対して笑顔を向けることが多かった。

「勇也君は何か部活には入らないの？」

「そういえばそうだよ。入ってなかったの？」

「部活は前にサッカー入ってたけど、だるくてやめた」

「うわぁ、根性ない！かっこわるう」

「るっさいな！あんま一つのこと集中したことないんだよ」

運動は嫌いじゃないが、何か一つのこと連続で興味を魅かれることはない。だから、勇也は長続きしないのだ。

「体育くらいで充分」

「まあ、一通りやったら次のに変わるしね。私は好きなのにできないんだよ！やれるだけいいじゃない！」

「っ」

その台詞に言葉を詰まらせたの母親。千歳は背を向けているから気付かなかつたが、勇也は微かに視線を上げた。

「でも、千歳運動できなそうだよな」

「失礼な！これでも中学は五段階で五取ってたもん！」

「へえ、意外！」

雰囲気は崩れず逆に笑いが起きる二人の会話。固くした表情を元に戻して勇也を不思議そうに見つめる母親。

普通の人なら何て答えただろうか。大変だなとかそっかとか少し気

遣うような言葉を彼女にかけていただろう。だが、勇也は違った。気遣うのではなく、思ったことをただ素直に述べていた。

「治ったら勝負して勝ってやる！」

「ほお。男なめんなよ。返り討ちにしてやるよ」

その光景を羨ましそうに目を細めて母親は病室を後にした。

「勇也は今まで好きな子とかいなかったの？」

林檎を器用に剥いていく勇也の動きを止めたのは彼女のこの言葉。あまりにも突然で果物ナイフを落としそうになる。期待に輝かせた瞳で見つめてくる彼女に顔を引きつらせて、林檎とナイフを置いた。

「……………いないよ」

「今の間はすごい怪しいよ？」

「いないから！」

「ムキになったあ！絶対いるよ！」

埒のあかない様子に最終手段。

「そういうお前はどつなんだよ？」

「へ？」

思いがけない返しに千歳は目を丸くする。瞬きを二回連続でやった後、首を大袈裟に振った。

「い、いない！」

「今のもかなり怪しかったぞ？」

「むう、何かむかつく……」

悔しそうに口を―にしていると、急に笑顔になった。

「いたよ！」

「えっ！？」

「今までに好きな子とかだよね？」

嬉しそうに頬を染める千歳に内心焦りながらも勇也は引きつった笑顔で続きを待つ。

「正確には、い・る、だけどね」

熱い視線の先にはもちろん勇也。何を言いたいのか理解して顔を真っ赤にして荒げた声を上げた。

「ずりい！」

「なあによ！本当のことでしょ」

納得できない顔で仕返しを考え始めた。  
最近、勇也に不安なことは全て打ち明けてるため笑顔が多い。

「好きな子とかさあ、作る…ものではないよな」

「え？」

仕返しを考えていたはずの彼は何故か違うところで悩んで、口に出す。言いたいことがわからなくて、千歳は小首を傾げた。

「よく彼女、彼氏を作りたいと言っけど…好きになる条件て何だ？」

「うーん、選んでる子はいるけど…」

「結局それは『好き』ではないだろう？」

『好き』とは自分でもコントロールできないもの。  
誰を好きになるか、わからない。

「作りたくても作れないのが『好き』で、『好き』の感情が芽生えてからその人を恋人にしよう…『作る』と言っけど…じゃないかな？」

好きな人はできるもの。  
恋人は作るもの。

「そうだね。私も勇也を好きになるとは最初…思わなかった」

「うん。だろ？作れないから愛しくて、尊いんだ」

「うん。だけど…作りたいたいと思うのは一度この温もりを知ってしまった人じゃないかな？」

じつと熱っぽい視線を勇也に向けた。彼は何も言わずに見つめ返し、先を促す。

「この安心な場所を…心地よい場所を知ってしまったから…。また、求めてしまっただと思っ」

「そう、だな」

「私も…そう思うの。勇也がいなかったら私は今いなかったかもしれない。絶望に押し潰されて、諦めて、死を受け入れてた。正直、今でも不安は過ぎる」

泣き出しそうに瞳を揺らす彼女の手を強く握った。苦笑した千歳はかすれた声音で続ける。

「それでも、勇也を見る度に…自分の夢を思い出す度に、その不安は消えるけど」

「それでも、消えない不安のことが心配？」

頷く彼女に微笑して、勇也は瞳を閉じた。穏やかで包み込むような静かな声で述べる。

「なら、それすらも消せる誓いをしよう」

「え？」

「夢と誓いは違うだろ。夢はあやふやな自分の人生設計。だけど、誓いは約束された人生」

目を開ければ潤んだ彼女の瞳。ある衝動を何とか堪えて、そして誓いを。

「千歳が手術に成功したら…」

「結婚しよう？」

不安のではなく、感激の涙を流した千歳はキザと、弱々しく呟いた。

愛してる

わたせちき合つ僕らは

願うように切ない声音で

いつまでも

## 誓い（後書き）

十一話目です。ここまでお付き合いさしてくれたことにとても感謝しております。少しずつ恋愛が濃くなってきました。いつこの話は終わるのでしょうか？と自分でも不安になります。

次第に会話文が増えてる気がして、焦りながらナレーションを増やしております。名前や同じ言葉が多いこの小説をどうか最後までお付き合いして頂けると嬉しいです。

三亜野雪子

## 球技大会

過ぎ去る

楽しい日々

「勇也！帰ろう？」

二年の教室に顔を出したのは千歳。友達と話していた勇也はそれを止めて教室を出る。

「ああ。じゃあな！」

「話してたなら別に終わってからでもよかったのに」

「別に大した話じゃねえよ。あ、今日おばさん来るんだっけ？」

「うん。何かお土産持ってくるって」

「何気にいい果物多いよなあ。全部甘くて美味しい」

「私的にはどうして勇也がそんなに包丁慣れしてるかが気になる」

微妙なところを問われて勇也は眉を寄せる。両親が共働きの勇也の家では時々彼が食事を作る。そのため、包丁が自然に扱えるほど慣れてしまった。

「あ、そういえば今度いつちゃんとしたデートできるの?」

「あ?んなもん春休みに決まってるだろ?」

「ええ!一ヶ月以上あるじゃん!」

「仕方ないだろ。お前、また発作起きたら当分病院だぞ?」

納得いかなそうに顔を膨らませる彼女に一瞬許しそうになるが、勇也は何とか堪える。病気のことに関して甘くするわけにはいかないのだ。

「困らせんなよ。心配してるんだ」

「わかってるけど…。じゃあ、もし発作起きなかつたら春休み何回もデートしてくれるの?」

「もちろん。疲れなくらいにな」

その言葉で機嫌を直した。

付き合い始めて早三ヶ月。変わらない二人のやり取りと思っていたが、恋人になってから千歳はよく勇也に甘えるようになっていた。

「次のデートはお花見かな？」

「お、いいな。それ」

「もちろん勇也が弁当作ってね」

「え？マジか？何か普通逆な気がする」

「私、したくても病院だから」

しょんぼりと肩を落とした。苦笑して溜め息をついて彼女の頭を優しく叩く。

「わあかった。好きなもの作ってやるよ」

「本当？じゃあ、桜餅とお団子とようかん！」

「全部菓子かよ！つてかちよい無理あるし！」

突っ込むと笑いが込み上げて。互いに笑う。何でもない会話が二人の心を和ませる。

病院に行くまでの道のりは二人のちょっとしたデート。

「じゃあ、千歳また明日な」

「うん。気をつけて帰ってね」

病院で数時間過ごした後、勇也はいつも通り帰っていく。

僕らは

過ぎ去る一日を

大切に

「球技大会？」

二月の行事を聞いた勇也は少し嫌そうに顔をしかめた。

この学校の球技大会は夏と冬で一年に二回ある。勇也は運動は好きだが、行事系はあまり好きではない。

「面倒だなあ」

「何言ってるんだよ。お前確実に三つ出してもらうからな！」

「おま、それ全部じゃねえか！」

男子の種目は野球、サッカー、バスケ。全て時間がずれているため掛け持ち可能なのだ。

「だってお前運動神経いいじゃねえか」

「あんなあ…。はあ」

どう言っても結果は変わらないと理解した勇也はただ受け入れるだけだった。

「三つ？すごいじゃん！頑張ってるね」

「やだよ。面倒」

「えー？駄目だよ。頑張らないと」

説得する千歳になおも反抗する勇也。だが、ちらりと彼女を見て何うように聞いた。

「なら、頑張ったらご褒美くれる？」

「え？」

子供のような顔を向ける彼だが、彼女は何故か顔を赤くする。

「な、何言ってるの！」

「ご褒美って言ったけど…何考えたの？」

しまったというように口を手で押さえて彼女はじとっとな勇也を睨む。その顔が面白くて失笑した。

「もう！意地悪！」

「ははは！じゃあ、楽しみにしてる。ご褒美」

「て、勇也！？もう！」

勝手に約束して、勇也は球技大会を面倒な行事から楽しみの日としてインプリントした。

そして、球技大会。

体操着に着替えてギブスをつけた。

「仕方ねえ、やるなら優勝するか」

まず最初は野球だ。ファーストを守る勇也はボールが何もしなくてもやってくる。お手持ちの反射神経でグローブでボールを包み、ランナーをタッチする。

「アウト！」

あっという間にスリーアウトを取り、攻撃に移る。面倒そうに頭を掻いてバットを握る。ボールを簡単に見分けて、ストレートボールを打つ。

「すげーホームランだ！」

小走りでホームを回り、見事点を取る。

「野球優勝！」

楽々野球の優勝を取った。

次はバスケだ。体育館に移動して、勇也はボールをついた。

「大丈夫なの？そんなすぐに」

見学していた千歳が心配して話しかけてきた。それが嬉しかったのか、勇也はにっこりと笑ってボールを放った。思わず受け取って千歳は首を傾げた。

「見てろ！惚れ直させてやる！」

張り切って宣言した通り彼はバスケでも点を入れ、見事勝利した。

「すごいすごい！」

千歳は勇也に飛び付いて大喜びだ。楽しそうな彼女に勇也も満足そ

うに笑う。

「次はサッカーだ。それで勝ったらご褒美な！」

「な、それしか頭にないの？」

「たりめーだろ！そのために頑張ってたんだ」

笑って彼はまた運動場に戻る。白と黒のボールを足で操って転がす。部活した時を思い出しながら彼はリフティングをやって見せた。

「サッカー部ってのは本当なんだね」

「んな嘘ついてどうするんだよ」

「確かに…。まあ、でも、頑張ってたね」

彼女の声援に親指を立てて勇也は仲間と共に試合を開始した。

もちろん結果は優勝。

「はあ、疲れた」

「本当に優勝しちゃうんだもん。すごいね」

いくら勇也が運動神経がいいと言っても三つの種目を優勝させるには無理がある。勇也のクラスのチームがよっかたのも一応勝因だろう。

「惚れ直したか？」

「……………うん」

素直な返答に思わず戸惑った。優しく笑う彼女はやはり自分も出来ないことが哀しいのか、淋しそうで。

勇也は彼女の身体を包み込んで耳元でささやいた。

「しほ褒美は？」

「しょうがないなあ」

愛のある溜め息をついて、彼女は甘いキスを勇也にあげた。

甘くて

切ない

大切な日々を

僕らは今

歩んでいる

## 球技大会（後書き）

十二話です。三話くらいで少し季節を早く過ぎさせたいと思います。次はおそらくお花見くらいにいきますかね。私の方もお花見の季節のはずですが、もう散り始めているから遅いかな？  
しばらくこんな平穩で柔らかい話が続くと思います。

## お花見

春休みは

お花見

寒い季節も無事に過ぎて、お花見の季節が訪れた。いつの時か話していた通り勇也と千歳はデートのためにお花見をすることになった。朝早くから起きて、弁当を作る勇也。できる限り千歳のリクエストに答えられるように昨日から下ごしらえをしていた。二人分の弁当を無事に作り終えて袋に詰める。それを肩にかけて勇也は家を後にした。

「勇也！こっちこっち」

大きく手を振る千歳に勇也は弁当を片手に近付いた。妖艶な桜を見上げる彼女につられて勇也も桜を見つめた。

「桃や梅も綺麗だけど…やっぱり白っぽい桜が一番好き」

「ああ。儂いピンクがいいよな」

ちらりと横目で千歳を盗み見ると調子はよさそうだ。三学期、それでも彼女は小さな発作を何回か起こして、学校を早退している。少しずつ頻繁になっていいるのも本人が一番理解しているだろう。今日、二人だけでお花見するのは正直少しだけ不安があった勇也。元気そうな彼女の姿にとりあえずは安堵していた。

「じゃあ、さっそく弁当食べるか」

「うん！勇也のお弁当楽しみにしてたんだ！」

弁当を開けると感嘆の声。たまご焼き、ウインナー、お浸し、煮物、炊き込みご飯……。二人で食べきれるかわからないくらいたくさん詰まったお弁当箱。これを一人で用意したのだから感嘆の一つも出るだろう。

「すごい！美味しそう！」

「ゆっくり食べようぜ。お花見なんか食べる以外何もすること

ないんだから」

「うん！」

少しずつ散り始める桜に視線を向けて二人は味の染みこんだ煮物を口に入れた。周りにも同じようにお花見をする者が何人か見えたが、二人だけというところはいなかった。綺麗とまた呟く彼女は桜に見とれて、勇也はその彼女に見とれていた。

「勇也って主夫になれるよねえ」

「それ、あんま嬉しくない。千歳は主婦にはならないのかよ！」

「え？」

結婚の約束をしているということは、勇也が主夫になってしまったら千歳が働くということ。それに今気付いた彼女は思わず顔を赤くした。

「えっと………。言ってみただけだよ！ほら、休日は料理してくれたりとかね？」

「まあ、いいけど。千歳が働きたいなら俺が主夫くらいやったって……。家事は嫌いじゃないし」

「いや！頑張つて主婦やるもん！家事とかそういったこと今までちやんとやったことなかったし、私がやりたい！！」

必死に言ってくる彼女が可愛かったのか、勇也は噴き出した。二人の中には今、発作よりもその先にある夫婦生活。誰もが気の早いと思うその将来は二人の中ではそんなに遠くない未来。

「何笑つてるのよ！」

「あはは、わかったわかった。主婦は千歳な。エプロン姿の千歳楽しみにしてるよ」

「な、今時エプロンしてる人なんてあんまりいないよ！」

「エプロンは流石にしるよ。服汚れるぞ？」

もつともな言葉に千歳は悩む。エプロンなど今までちゃんとつけたことがなかった。彼女の頭の中ではそんなに可愛いオプシオンではなかったのだ。

「可愛いエプロンを勇也が買ってくれたらつけてあげる」

「そうきたか。ま、別にいいけどな。とびきりなやつ買ってやるよ」

時間はあっという間に過ぎて、既に三時を回っていた。やっとお弁

当を食べ終わった二人は弁当箱をしまつ。すると、勇也は新しいタッパを彼女の前に置いた。

「まだあるの？」

「ご飯の後はおやつの間だろ？」

開けると中にはピンク色の餅を葉にくるんだ桜餅。本当に作ってくるとは思っていなかった千歳は驚きで声も出ない。

「さあ、召し上がれ」

「……………うん!」

甘くて美味しいお餅を頬張り、千歳はこれ以上ないという幸せを感じていた。

陽が沈む時刻。二人は病院に向かって歩く。お腹いっぱいになった二人は少し足が重そうだ。

「美味しかった。ありがとね」

「病気が治ったら千歳が作ってくれよな」

にっこりと無邪気な笑みを勇也に向けて、彼の腕に絡みつく。

「うん。治ったらお弁当もバレンタインチョコも何でも作っちゃう」

「何だ、まだチョコのこと気にしてたのか？」

「当たり前でしょ？彼氏いるのに本名チョコがただ買った物なんて哀しくなっちゃうよ」

しょんぼりと肩を落とす千歳に勇也は苦笑して、彼女の頭を撫でる。勇也の手が気持ちよくて、千歳は微笑む。

バレンタイン。恋人同士なら外せないこのイベントに千歳は手作りチョコをプレゼントしたかったのだが、病院でそんなことができるわけがなく、結局買ったものを勇也にあげた。彼もそれを気遣ってお返しは買ったものにしたのだが、千歳は未だに気にしていたらしい。

「いいよ。治ったらその分たくさん作ってくれれば」

「うん」

「それに、チョコだけじゃなくてキスももらったし」

「……………エッチ」

「何でだよ!」

何回甘い時間を過ごしても彼女はキスに慣れはしない。それが、また可愛いのだが、エッチと言われる筋合いははっきりいってないと勇也は思う。

「今度襲つぞ」

「ひどい!勇也、私を殺す気?」

「冗談だ、気にするな。抱いて死ぬ可能性があるなら治るまで待つさ」

心臓病。激しい運動をすればそれだけ発作が起きやすい。それを悟ったコメントに千歳は顔だけでなく首まで真っ赤にして、勇也の手を振りほどく。

「な、な、な、~~~~、馬鹿!エッチ!スケベ!」

「……………そこまで言うことないだろ?男なんてこんなもんだ」

「ででででも、そんなこと堂々と」

「好きな女の前で堂々と言わなかったら、一体誰の前で堂々と言う

んだよ？」

「そ、それは……。いや！他の人の前は駄目！」

「お前、一体何想像したの？」

「え？あ、内緒！」

手を無意味に振って、誤魔化そうとする千歳だが、下手だ。また噴き出しそうになるのを堪えながら、勇也は彼女の身体を引き寄せた。あったかくなってきたとはいえ、まだ微妙に肌寒い。服のせいで体温は感じないが、触れているところが何だか安心した。

「馬鹿。俺が他の女に言うかよ」

「な、何でわかったの!？」

「お前、嘘下手過ぎ。大体、俺が他人のためにここまで自分の時間使って尽くすかよ」

学校の友だち、両親、誰であつても心を開けなかったから病院の屋上にいたのだ。そんな勇也が千歳のために毎日病院に向かい、お弁当を作り、千歳のお願いをできる限り叶えようと頑張っている。そんな姿去年の今頃は考えられない。

「そうだね。ありがとう」

「……………じゃあ、帰るか」

身体を放して千歳の手を引きながら病院に向かって歩く。いつもの勇也ならまたキスを迫るのだが、千歳は拍子抜けして何も言えない。これはこれでつまらないと何となく思ってしまった。病室まで送ってくれた勇也を部屋に入れて、千歳はカーテンを開ける。

「ここからじゃ桜が見えないのが残念」

「そうだな。でも、この部屋は千歳がいれば俺は充分だ」

キザだ。千歳はそう思って口元を緩ませる。勇也はお弁当の袋を持って、扉に近づく。

「今日は帰るよ」

「え？帰っちゃうの？」

「また明日くるから」

いつも勇也に求めてばかりの千歳はこれ以上わがままは言えない。意を決して彼に近づいて、背伸びをする。触れ合った唇は温かくて、勇也は茫然と彼女の顔を見つめる。顔を

赤くした千歳は視線をそらして、ぎこちなく言った。

「今日はありがとね。また明日」

「……………あ、ああ。明日な」

ちらりと勇也を覗けば、照れながらも嬉しそうな顔。千歳も笑って勇也を見送った。

「珍しいこともあるもんだ」

顔の緩みが直らないまま勇也は家まで帰った。  
からになった弁当は何よりも嬉しいことで。春休みのデートはまだ続く。

桜のように

君は淡くて

切ない存在



## お花見（後書き）

十三話です。今回の話は少し長めです。ラブラブですねえ。実際に私は男の人と付き合ったことなどないので、よくわかりませんが、本当にこんな風に思われていたらいいものですよ。

まあ、実際にはないからこういった話は夢があるんですが、次もおそらくほのぼの話かな？

## 受験生

僕は受験生

君は二年生

春休みはあつという間に終わりを告げて、新たな学校生活が始まった。ちよつと見慣れないクラスメイトに先生、席、全てが変わる新年度。進学者、というのは勇也にとっては堅苦しくて、あまり自覚したくない事実。入りたい大学、学部、学科、就職などを自分なりに調べて進路希望調査に書き入れれば少し難しいと言われた。

勇也が言った所は今の家からあまり遠くない大学。難しい、と言われても彼はそこ以外に考える気はなかった。卒業しても千歳と変わらない生活を送るためにできる限り近い所に行きたいと思っていた。もちろん、そのことは千歳には内緒だ。いつものように彼女を病院に送った後、勇也は勉強をするようになった。毎日夜中までそれを続けるのは流石に堪えて、授業中欠伸をよくするようになった。

やばい、これじゃあいつかバレるな……………

欠伸を噛み殺しながらも大きく溜め息をついた。季節は春から梅雨になりかけている。桜の花はもう全て散って、綺麗な緑が繁っている。湿度が多くなりかけているこの時期は普通にしていても憂鬱だ。

「大学か……………」

寝言のように呟いたその言葉は何の意味もなく、彼は何も考えていなかった。だが、今一番気にしているものではある。学校推薦をもらえると言ってくれたので他の人よりも受験は早い。勇也にとつては早く終わらせて、千歳を安心させてやりたいのだ。

「あいつはどうするんだろうな」

お互いに進路の話をちゃんとしたことはなかった。おそらく、無意識のうちにこの話を避けていたのかもしれない。自分のことを考え始めると千歳のことが気にかかってしょうがない。だが、今進路の話を持ち出せば彼女は勇也に大学のことを聞いてくるだろう。それは非常に困る。

「ま、俺の進路が決まったら聞いてみるか」

できることなら、その時にはもう……………」

儂く抱く願いは、いつ叶えられるのか。

「ねえ、いいことあったんだよ！」

いつもよりもご機嫌な千歳に勇也は目を丸める。授業が終わった後にこんなにも楽しそうなことはあまりない。友達と何かあったのかと思っていた勇也は思ったよりもいいニュースをこの後聞く。

「体重が少し増えてたの！あの二キロ増えれば手術できるんだよ！」

「本当か？つて、今何キロなんだ？」

「女の子に体重聞くなんて最低！」

思いがけないブーイングに彼は口を引きつらせた。未だに彼女の身体は腕も足も全て細くて、折れそうだ。後二キロ、簡単そうに思えて決して簡単ではないその重さ。彼女が手術できるのは一体いつのことなのか。

だけど、少しでも幸せに近づけたことに勇也は破顔する。自分と同じように喜んでくれた彼が愛しくて、彼女も。

「なあ、千歳。俺のこと好きか？」

「な、何よいきなり」

幸せだと思った時、何となく聞きたくなるのは彼女の気持ち。神妙な表情の勇也を見ると千歳ははぐらかすわけにはいかない。少し顔を赤くして、微笑む。それだけで彼女の気持ちはわかるのだが、やはり言葉が聞きたい。黙っていると、小さくだがはっきりと述べた。

「好きよ。誰よりも大好き」

二人の支えはお互いで。同じ所を見つけて、同じ所で好きになって、同じ所で関係を結んだ。偶然にしてはでき過ぎた人生に二人は少からず運命という二文字を頭に浮かべたこともある。だけど、それを信じるには重過ぎる言葉で、口に出した事はない。言葉は人の人生を左右させる戒めだから。

「うん、俺も大好き」

高校生、誰もがそれは子供の気持ちと吐き捨てるだろうか。結婚の約束もして、ふとした瞬間に愛を確かめ合う。それは確かに子供がするような可愛らしいことかもしれない。

だけど、二人にとっては今が一生に一度しかないくらい大切な時間。お互いを大切に、お互いの時間を大切に、お互いの存在を守る。こ

れは大人でもなかなかではしない尊い気持ち。

「ねえ、夏休みは遊園地に行きたい」

「もう、夏休みの話かよ。気が早いなあ」

「だって、長い休みじゃないとデートしてくれないんでしょ？」

限られた時間の中で

一生懸命愛し合っていくかのように

僕らは互いの時間を大事にする

「あ、休みの日は午後までいなくてもいいよ」

「え？どうして？」

「最近夜遅くまで勉強してるでしょ？なら、休みの午後も使っちゃらなきゃ損だよ！それで体調を悪くしちゃうと元も子もないしね！」

流石彼女と言うべきか。勇也の行動はお見通しだ。バツが悪そうに頬を掻いて視線をそらす。千歳は両手を彼の顔に添えて無理に自分の方へ向かせた。

「勉強頑張つて」

「ああ。必ず志望校に合格してやるぜ」

にっこりと形のよい笑顔を浮かべて、千歳は顔を勇也に近づけた。もう、慣れ始めた彼女とのキスはそれでもまだ心臓が高鳴る。ゆっくりと離れていく瞳を見つめた。細過ぎる身体を引き寄せると、やんわりとした温もりが伝わって。

「じゃあ、また明日な」

「うん。またね」

名残惜しそうに身体を放して、勇也は家に帰っていく。こんな一日を繰り返して、二人は愛を深めていく。

そして

季節は僕らの人生を変える

夏になった

## 受験生（後書き）

十四話です。次はシリアス……、この話もなかなかシリアスでしたね。なら、次もシリアスです。夏休みの話ですね。受験生なのに遊んでいいのかよと勇也に思うかもしれませんが、気にせずに。彼女が大事なんです！！  
そして私も受験生。忙しくなる前にこの話を終わらせたいと思います。

三亜野雪子

## 夏休み

受験と

約束

間に揺れながらも

結局僕は

どちらも選んでしまっただ

三年の一学期の成績は勇也にとってかなり重要だ。先生に手渡された折り畳まれた紙を恐る恐る開いて、勇也は順に数字を追っていく。9、9、8、10、10、9、10、8、10、10、9、9、10、と決して悪くない数字がその場に横並びしていた。頭の中で五段階に計算していくと5、5、4、5、5、5、5、4、5、5、5、約4、8。ここまで取れたなら大抵のところは推薦で進めるだろう。先生にも驚かれ、これならいけるかもと背中を押された。少しばかり自信をつけた勇也はこの夏休みが最後の追い込みだと悟

る。進学校でここまで成績を上げられたのも勇也に思うものがあるからで、気を抜いてしまつわけにはいかない。それがわかっていゝからか、成績を見つめていても顔が緩むことがなかった。

そして、勇也は高校生活最後の夏休みに入った。

「やっと夏休みだあ！」

「あつちい。今年の夏は一段と蒸すよなあ」

「まだ仕方ないよ。この前梅雨過ぎたばかりだし」

ワイシャツ姿の彼女は清しく見えた。鞆を軽く振り回して、スキップを踏んでいる。ずっと楽しみにしていた夏休みがきたのだから彼女がはしゃぐのも無理はない。だが、スキップをずっとするには体力を浪費する。勇也は千歳の腕を引いて止めさせた。

邪魔をされたことに気分を害することもなく、千歳は嬉しそうに彼の腕を掴んだ。

「ね、ね、今度のデートはいつにする？」

「本当に楽しみだったんだな。そうだなあ、本格的な暑さがくる前に一回やるか？」

「本当？やったあ」

まるで子供のようになり喜んで彼女が可愛くて勇也は目を細める。

細過ぎる腕は変わらなくても、彼女の病気は治っていなくても、その温もりは彼を安心させてくれる。

毎日彼女の病気が早く治れば良いと願っている。だけど、病気がなければいいとは思わなかった。これは不謹慎なことかもしれない。それでも彼は彼女の心臓病に感謝した。

「怒るかな？」

「え？何が？」

「俺は少しだけ千歳の病気に感謝してたんだ」

この病気になってくれたから二人は出会えた。そのことを十分に承知しているから彼はこの病気に感謝して、この病気を恨んだのだ。

「馬鹿。そんなの私も一緒だよ」

人は醜くて、愚かな感情を持つ生き物だから。だけど、その感情は時に優しさに変わる。

この心臓病になってからずっと彼女はどうしようもない絶望感に浸っていた。けれど、勇也と会ってから絶望は希望に変わり、いつし

かこの病気は勇也に出逢うためのものだったのではないかと思いはじめた。  
そんなことありはしないのに。そう、わかっているでも思ってしまうほど彼女は病気に感謝した。もちろん、これが最初で最後の感謝だろうと思う。

「じゃあ、デート先はやっぱり遊園地だろ？」

「うん！あ、でもアトラクション物は……………」

「そんなもの乗りたいって言うても乗せるかよ！わかってるだろう？」

ガラス細工に触っているようなそんな扱い方を時に勇也は千歳にする。それが嬉しくて、淋しくて、切ない。そんな感情をいつも何とか堪えている。  
儂く微笑んで、千歳は頷いた。

夏休みの約束は

遊園地

だけとそこで

勇也達が選んだデートの日は夏にしては涼しい絶好の日だった。高校生が行く所にしては身近で小さな遊園地に二人は向かった。日焼け止めの匂いを気にして勇也から距離を取る千歳に彼は無理矢理彼女の手を取って遊園地に入る。涼しいといっても夏。じめつとした暑さで汗はかく。握られた手の汗を気にしながらも、感じる温かさ  
に安心した。

「何から乗るんだ？」

「あれ！ティーカップ！」

おそらくほとんどの遊園地にあるだろう、可愛らしいカップを指さした。考えてみれば、ティーを入れるからティーカップであるのだから、これは人を入れるカップ、ピーポーカップ又はマンカップ、ヒューマンカップと言うのではないか。とまたよくわからないところに思考を飛ばしながら勇也はカップの中に千歳を乗せた。

「お前、あんまりアトラクションとか乗れないのに本当に遊園地だよかったのか？」

「うん！勇也と一緒になら何処だって楽しいよ！」

無邪気に笑う彼女は本当に可愛くて、勇也は微笑する。

ハンドルを回さなくてもゆっくりと回るティーカップは沢山の人が乗っていても、そのカップにだけ入った二人だけの時間のような錯覚を起こさせる。目の前にいる互いを見つめ合って、笑う。

「次あれ！ほら、あの変なの！」

「お前、それ創造者に失礼だろ」

呆れながらも彼女の言う乗り物に順に乗っていく。一日は短くて、すぐに夕方になる。五時を回っても夏だから昼と変わらないくらい明るい。

観覧車に乗った二人は上空の景色を堪能して、次の乗り物を探す。

「うーん、もうほとんど乗っちゃったなあ」

「そろそろ六時になるし、次を最後にするか」

「うん、じゃあ、あの迷路」

小さいが、結構本格的な迷路は最後を飾るのに相応しい物だった。千歳は少し意地悪そうな笑みを向けて勇也にある提案をする。

「ねえ、別々に入って最初にゴールした方が負けた方の言うことを一つだけ聞くってのはどう？」

「お前そういつたの好きだなあ。別にいいけど」

観覧車を下りて、二人はその迷路の方へ向かう。好都合なことに迷路には二つのスタート地点があった。二人は入口の前に立って、同時に入った。

パネルを繋げて作った道は時に鏡などを使って道があるように錯覚を起こさせた。何回も行き止まりにあたりながらも順に道を進めていく。

「結構長いなあ」

思ったよりも長いその道に勇也は嫌な予感がした。

考えてみれば二人で出掛けた時にここまで別々にいたことはない。

こんな時にもし彼女の発作が起きていたら、と考えて全身が冷える。思わず走り抜けて、ゴールに辿り着いていた。そこにはまだ彼女の姿がなく、勇也は喉を鳴らした。

「千歳！」

迷路の中に大声で叫んでも彼女の声は戻って来ない。いくら勇也が走ってきたとしても、声がないのはおかしい。どうしても我慢できなくて彼は彼女が入った方の道を逆走し始めた。

出口から入口に戻るの簡単だ。だが、いくら走っても彼女と会わない。

「きゃあ!」

「うわ!すみません」

勢いでぶつかってしまったのは彼が探す千歳ではなく、他のお客の女性だった。尻餅をついてしまった彼女の手を取って起こした。

「あの、女の子……高校生くらいの女の子を見ませんでしたか？」

「いえ、見てませんけど」

「そ、そうですか」

肩を落として勇也はもう一度出口に向かう。それでも彼女に会わないで、息を切らしたまま出口に立ち尽くす。発作を起こしたわけではない。だけど、姿が見えないというのは更に彼の心を掻き乱した。焦躁で顔が青くなる。過保護なのかもしれない。だが、そうならなければならぬ時だ。ある。

暑い中にいながらも

僕の身体は冷えきって

ただ、支配する恐怖に身を縮めるだけだった

## 夏休み（後書き）

十五話です。今回は二話に分かれています。少し微妙な所で切りましたが、お許し下さい。そろそろ終わりに………近づいてるのかな？ 私にもわかりません。次は後半です。最後までお付き合いして頂けると嬉しいです。

三亜野雪子

## 遊園地

### 遊園地

そこで君は

冷えた身体は金縛りにあつたように動けない。暑い気温の中なのに寒く、寒いのに汗が流れる。気持ち悪いそれを拭うこともできない。喉が渴く。汗が流れる。身体が冷える。鳥肌が立つ。脳裏に浮かぶ最悪の状況が離れない。

「勇也？どうしたの？」

両手にジュースを持った千歳は不思議そうに勇也を見つめた。平然としている彼女に彼は深く溜め息をついた。一気に力が抜けてそこにへたり込む。慌てて千歳は近寄って顔を覗いた。汗塗れな顔は今まで千歳を探して走っていた証拠で。

「勇也、ごめん。喉渴いたから飲み物を」

「馬鹿野郎……………、心配……………けんな」

勇也は千歳の身体を引き寄せてきつく抱きしめた。

「あら、見つかったんですね」

先ほど勇也がぶつかってしまった女性が出口から姿を出した。よかつたですねと言いながら去っていく彼女からまた勇也に視線を移して、千歳は苦笑する。

「ごめんなさい。まさかここまで心配するとは思わなくて」

「お願いだから、怖いことしないでくれ」

わかっていた。これは理不尽なことだと。彼女は自分よりも早く出口に着いて飲み物を買って行っていただけ。だが、その空白の時間が勇也にとって一番恐ろしいもの。恐怖な時間。わかっていても言わずにはいられなかった。

「勇也、ごめんなさい。大丈夫だから……………ね？」

ジューズを置いて彼の背を撫でる。恐怖が少しずつ抜けていく。寒かった身体は次第に温められて、鳥肌もおさまった。呼吸は整って、ゆっくりと千歳から身体を離れた。

「いや、ごめん。俺も……………心配性だよな」

笑おうとして失敗する勇也に千歳は胸が痛くなった。悪気などなかった安易な行動が勇也を傷付けたと自分を責める。彼の頬に手をあてて流れている涙を拭いた。哀しそうな彼女の顔に勇也は複雑な顔をした。

「ごめんなさい。心配してくれてありがとう」

「無事でよかった……………」

安堵の笑みに千歳も優しく笑う。びっしょりと濡れた彼の身体は自分を懸命に探してくれた証拠で、ジューズを買いに行ったただけであんなにも叱ったのはそれほど自分のことを心配してくれたというこ

「勇也ジューズ飲むでしょ？」

「あ、うん」

場の雰囲気を変えるためか、千歳は勇也に買って来たジュースを渡す。渴いた喉をそれは潤し、気持ちを落ち着かせてくれた。

「帰ろう?。」

「うん。そつだな」

二人は遊園地の入口まで歩く。少しずつ赤くなり始めた空は二人を明るく照らす。

入口付近にあったお土産店を見つけて、千歳は彼の腕を引っ張った。

「お母さんにお土産買わなきゃ。あと記念な物何か買おう?。」

「ああ。そつだな」

店に置かれるのはこの遊園地のマスコットキャラと呼べるキャラクターのキーホルダーやシャープペン、財布、ノートなど様々な物だ。千歳は母親に小さなお菓子の缶を手にとって自分のお土産を考える。

「あ、ネクタイピンだ!。」

遊園地のお土産にはシンプルで可愛いタイピンを手に取り考える。勇也の高校は男女共にブレザーだ。ネクタイピンは使おう

と思えば両方使う。

「ねえ、勇也！一緒にこれ買おう？」

「これか？まあ、いいけど。何だ？学校につけてくのか？」

「うん！お揃いって何かロマンチックだし」

楽しそうに笑う千歳に勇也はそれを二つ持つ。

「おごつてやるよ。記念だろ？」

「やった！勇也大好き！」

お土産を手にして御機嫌な千歳は入口でチケットを店員に見せた。

「今からだと電車いつあるかなあ」

「さあな。行けばわかるだろ。待つのもデート……………っとな」

「あはは。そうだ　　っっ」

胸に感じる痛みに千歳は地面に膝をつく。呼吸がとまってしまっほどの鋭さに、額に汗が浮かんだ。勇也は弾かれたように振り返って

千歳の顔を覗く。

青い。とぎれとぎれの呼吸がその痛みを物語っている。

勇也は遊園地の入口にいた店員に大声で叫んだ。

「救急車を！！早くっ！！！！！」

シンとした時間が重い。

作り物の明かりはいつもより暗く感じて、勇也は腕に力を入れた。じめつとする手は緊張から滲んだ汗のせい。恐れていたことが起きてしまった。考えてしまったから起きてしまったのではないかと、決してありえないことに後悔を抱いた。

「千歳……………」

隣で泣き始めてしまった千歳の母親の背中を必死で撫でた。正直、自分も人を慰める余裕がなかったため、言葉はかけなかった。

「大丈夫」

それは自分に言い聞かせている言葉。大丈夫、そう咳くほどに不安は募る。一分一秒が一时间よりも長く感じた。どれほどの時間がたっただろう。千歳が入られた部屋から担当医が姿を出した。

「千歳さんのお母さんですね？」

「はい。千歳は……………」

「大丈夫です。今は眠っています。ですが……………」

妙に重い雰囲気を出す医師に勇也は不審に思った。口を開けば渴いた喉が舌からはがれる。そこから出した声は案の定かすれていて。

「何ですか？」

「もう、長くはないかもしれません。今年中に手術をしなければ千歳さんの生命は……………」

告げられた真実は勇也の中にある希望の光を見えなくさせた。

今年中

それは呪文のように僕の頭に木霊して

絶望という感情を教えてください

## 遊園地（後書き）

十六話です。クライマックスが近づいています。未だにこれの感想も評価もきていないので淋しいのですが、挫けません！  
今年中。それが彼女の生命の時間。さて最後はどの様にして終わるのか楽しみにして下さい。

三亜野雪子

生きて

彼女に真実を

告げるか告げないか

今年中に手術をしなければ危険な状況。無情なその言葉は何度も勇也の頭の中で繰り返される。だらりと垂れた腕は何の力もなく、彼の心情を表わしている。隣りでは千歳の母親が泣き崩れてしまっている。

この前千歳はあと二キロ増えれば手術ができると喜んでいた。だが、その二キロ増やすのにどのくらいの時間が必要だろうか。言えることは一年では無理だということだ。あの時の千歳の顔を思い浮かべて、勇也は瞳を揺らした。

手術しなければ一年ももたないか弱き生命。血が滲むほど唇を噛み締めて、己の無力さに腹が立つ。ふらりと覚束無い足どりで人気がない所まで歩く。階段を上り、辿り着いた場所は彼女と知り合ったあの屋上。

いつもいたあの笑顔を向ける少女はいなく、淋しいその地を風にさらす。乾いた瞳を無心に向けて、彼はその場に座り込む。

「あと……どのくらい？」

あとどのくらい彼女の生命はもつのだろう。すっかり陽は暮れて、空には闇が広がる。冬よりは明確ではないが、かすかに輝く小さな光はまるで勇也を慰めているようだった。

乾いていた瞳は次第に目に溜まるもので揺れる。こぼれないように上に向けた顔は意味なく、そこから温かいそれが流れゆく。肩を震わせて、漏れる嗚咽を彼は抑えることなく空に投げつけた。

会ってからまだ一年もたない僕ら

高校生と未熟なその心で

懸命に愛し合い、支え合った

限られた時間の中で

彼女の病気が治るのを祈りながら

できることを、やれることを

ただ、懸命に……

目を腫らして戻ってきた勇也を見つけて、千歳の母親は椅子から立ち上がる。こちらも同じくらい目を腫らしてまっすぐに勇也を見た。小首を傾げながら彼女に近づいた。

「どうしました？」

「あの……………」

口を何回も開閉するところを見ると、言い難いことなんだと悟る。彼は座るように促して、隣りに腰を下ろした。千歳の病室にはもう入っているのだが、今は決心がつかない。しばらくそのまま会話もせずにはいたが、場の重さに耐え切れなかったのか、母親が口を開いた。

「もし、よかつたら千歳にこのことを言うか言わないか貴方が決めてくれない？」

「え？」

「多分、あの娘もそれを望んでいると思うから」

いつも千歳の世話をしてきた母親。誰よりも彼女のことを理解していると言っても過言ではない。彼女のことを思って、彼女のことを

考えて言った。勇也は困ったように視線を落とす。残酷なこれ自身は述べなければならぬのかと苦しむ。

「もちろん、嫌なら私から言うわ。だけど、話すべきなのかどうかは貴方が決めてくれないかしら？」

「どうして……？」

「貴方にはそれだけの権利があるから」

もう夜遅いからと言われ、今日のところは帰ることとなった。最後に千歳の顔を覗けば、既に顔色は戻り、整った寝息をたてていた。思わず微笑して、彼は病院を後にした。

楽しかった時間は嘘のようだと思うほど彼の心は凍っていた。今までにないほどの絶望を味わって、疲労を感じる。それなのにベットに入っても眠れなかった。

「どうして、こんなことになるんだろう……？」

ただ、幸せになりたいだけなのに

この世の中にはもっと辛い思いをしている者がいる。残酷なほどあっさり、簡単になくなってしまふ生命がある。だけど、そんなこと今の勇也には関係がない。人が大事にするのはやはり自分の周りにいる自分と同じ時間を共有する者達で。

それは誰であるかと同じこと。誰であるかと否定できない事実。

「神様、どうか

どうかっ」

彼女を救って下さい

翌日、病室には不思議に思うほどケロリとした顔の千歳がベッドに横たわっていた。雑誌を見ていた彼女は勇也の姿を認めて、起き上がる。やはり彼女の母親は昨日のことを伝えていないようだ。千歳は発作を起こしたことだけを気にしていた。勇也はまだ迷っていた。言うべきか、言わないべきか。ただ、彼女の顔を見たくて病院に足を運んだ。勉強も手につかないくらい心配だったから。

「ごめんね。また迷惑かけて」

「だから、気にしなくていいって。迷惑なんて思ってないから。お前が無事ならそれでいい」

ありがとう、と遠慮がちに呟いた彼女を優しく抱きしめた。予想していなかった行動に軽く目を瞠る。

迷いを、無くして。震える声音で勇也は残酷な真実を彼女に伝える。

「千歳。お前の身体

」

「……………え？」

耳に直接囁かれたそれに彼女の顔は一変する。小刻みに震える身体をきつく抱き締めて、勇也は目を閉じる。互いの鼓動は激しく打って、彼女の体温が下がっていることがわかった。

「それ、本当？」

「こんな冗談言えるほど俺は酷い奴じゃない」

「そつだよね」

冗談だと思っていたわけではない。おそらく彼女なりの精一杯の抵抗なのだ。身体を離して、千歳は顔を下に向ける。数か月間、希望を見つけた彼女はいつも勇也に笑顔を向けていた。

久々だった。ここまで絶望に満ちた顔は勇也に自分の病気を述べた時以来だろう。

「どうしたい？」

「そつだなあ、じゃあ残された時間を勇也との思い出にするよ」

「諦めるなよ」

真つ直ぐな瞳は千歳を捕える。有無を言わせないその雰囲気は彼女に息を飲んだ。一瞬沈黙がその場を支配する。いつも好きだった彼の瞳は今日は怖くて、頬に冷たい汗が流れる。

握られた手には必要以上に力がこもっていて、痛みを感じた。顔をしかめても緩めることはしない。

「残されたなんて……短い生命とかそんな風に思うなら、俺はお前から離れる!!」

「勇也………?」

「嫌なんだ!お前を失うのだけは絶対に」

無意識に流れている涙に気付かずただ愛しいその者の顔を見つめる。

彼女にこのことを伝えるかどうかを迷ったのは千歳の心情のことを考えただけではない。このことを聞いて彼女が諦めてしまうことを恐れたからだ。

「諦めないでくれよ。苦しいのはお前だけじゃないんだぞ?怖いなら一緒に泣いてやる。辛いなら愚痴を聞いてやる。苛つくならそれ

を俺にぶつければいい。悩んでも迷ってもいい。だけど、逃げないでくれ」

「勇也……………」

「諦めないでくれ。俺は一年後も二年後も三年後もその先ずっと、ずっと千歳と生きていきたいんだ。ずっと……………ずっと千歳と笑っていききたいんだ！」

最後の言葉は悲痛な叫び。いつの間にか彼女の頬にも涙が流れる。初めて彼がわがままを千歳に言った。優しく残酷なわがまま。握られた手は熱くて、胸も同じくらい熱くなっている。

「お前が諦めないで済むなら俺は何だってやるから」

「うん……………うん。ありがとう。勇也が私の彼氏でよかった」

互にくしゃくしゃな顔で優しいキスをする。絶望から生まれたのは愛。互いを思いやるその想いはどんなものでも代わりにならないほど貴重で美しいもの。

誰よりも何よりも愛している彼女を勇也は手放したくなかった。

生きて

それは優しく嬉し、残酷な願い。それを理解しているから、その言葉は言わない。だけど、その想いを伝えずにはいられないから彼は泣きながら訴えた。

愛してる

僕は何度も同じ言葉を繰り返して

崩れそうになった心を支え合った

## 生きて（後書き）

十七話です。生きて、という言葉は絶望にしかない人には本当に残酷な言葉だと私は思います。同じくらい残酷だと思う言葉は『頑張って』。

言葉は人の心を左右させる言霊。生きてという言葉はいつどんな時に使うのか……。使い方と使う時によって人との関係が大きく変わるような気がします。人間関係って難しいですね。

そろそろ話は終盤に入ります。私の考えに同意してくれる優しい人からの感想評価をお待ちしております。

三亜野雪子

不安

不安と

安らぎ

夏休み、それは発作を起こしてしまった彼女にとって不自由な休日となってしまうた。病室から外を眺めると湿度と気温の関係で景色が揺れて見えた。とても暑そうとしか思えない場所に彼女はいる。温度調節がされたこの部屋は快適ではあるが、何の感動も生まれない。なまった身体は捻らせることでしか解消できなくて、彼女はつまらなそうに息をついた。

「もう少し我慢しろよ。八月に入ったら許しがもらえるさ」

「うん。だけど、せつかくの休みなのに外に出ることもできないなんて面白くないんだもん」

頬をふくらませる彼女が可愛くて勇也は失笑してしまった。高校二年生。この年は一番遊びたい年頃だろうと大人びた考えを浮かべた。最近、彼は夏休みが終わった後のことをよく考える。発作は治まったから、彼女はまた高校に通い始めるだろう。二年生の二学期。そこであるのはいくつかの行事。特に修学旅行だ。勇也は気付かれないように瞳を曇らせた。修学旅行に彼女が行くということは数日間顔を合わせない日がくるということだからだ。自分が知らない時に彼女が発作でも起きたら、と考えたくないことを考えてしまう。

「勇也？どうかした？」

心配そうに覗き込む彼女に気付いて、勇也は顔を上げた。二学期のことを考え込んで彼女の視線に気付かなかったのだ。ぎこちなく笑って見せて、勇也は大丈夫と呟いた。

「大丈夫？最近また無理な勉強とかしてるんじゃないの？」

「大丈夫だって。ちゃんと睡眠もとってるし、無理はしてないから」

穏やかな笑顔に千歳は微笑んだ。

千歳はいつも勇也を見ているだけあって、彼に関しては鋭い。冷や汗を流しながら、内緒で息をついた。勇也が剥いた梨をシャクシャクと食べる彼女は幸せそうな顔を顔をする。

「ねえ、勇也。そういえばさあ私達の高校ってどんな文化祭とかやるの？」

彼女は去年、半年の間入院していたため行事系は全く把握していない。勇也は二年前のあやふやな記憶を頭の中から掘起こした。

「えっと、普通に模擬店とかかな？さして他の高校と変わらないんじゃないか？」

「本当？じゃあ、一緒に店回ろうね」

普通の恋人のような会話が彼女は好きだ。約束や記念日、デート、どんな些細な行事も彼女は喜んで勇也を誘う。

体育祭、文化祭、修学旅行。そんな順番で行事が続いている。彼女はまた修学旅行の方を気にしてはいないらしい。勇也は安心しながらも、また不安に襲われた。

「その前に体育祭かあ」

「その日はほとんど見学か？」

「そう、つまんない。勇也はまた無理矢理いろんな競技に出させられるんじゃない？」

「うげ………………。あーあ、次の日死ぬだろうな」

「金曜日でよかったね」

何も考えなくていい時間は二人にとって安らぎの時間。馬鹿な話を  
して、笑って、キスをする。それだけだったら普通の恋人同士なの  
に。そう、何度も彼は思った。彼女の病気に感謝しながらも、彼女  
の病気を恨んで、矛盾する気持ちが彼を苛つかせる。  
彼女はまだそれに気付かない。そのことに安堵しながらも淋しく思  
う。

「体育祭に文化祭に………修学旅行か」

どくん

そして彼女は呟いてしまった。彼が一番気にしているその言葉を。  
その行事を。

隠せない驚愕した表情に千歳は予想していたのか、目を細めた。顔  
を伺うように傾けて、大きくくりくりとしたその瞳を勇也に向け  
た。

「行ってほしくない？」

「何が？千歳は楽しみなんだろう？行けばいいじゃん」

思ってもいないことを言う。彼女の気持ちを潰ようなことは言いた

くなかった。精一杯の笑顔を彼女に向けて、勇也は更に言葉を続けた。

「そんなに過保護になっても、仕方ないし」

「うん。だけど、心配してくれてるんだよね？」

結局気付かれて彼は先ほどの言葉を後悔した。過保護なんて言わなければまだ気付かれなかったかも、と。病人である彼女に余計な気遣いをさせてどうする。っと、自分で自分を責めた。それも読んだのか、千歳はくすくすと声を上げて笑いだした。

「あははは！勇也、気にし過ぎ！気付いてないの？付き合い出してからずっと勇也そんな性格だったから！今更隠そうなんて遅いよ」

「なっ！何だとお！俺がいつそんな性格お前に見せたよ！」

「毎日だよ！ま・い・に・ち！」

拗ねたように口を尖らせる勇也に千歳はまた嘔き出した。付き合い出す前と変わらない状況。むしろ悪化していく二人の世界で彼らは変わらず、だが深め合う愛に互いに心を温めていく。

薬の香りが充満する白い病院。白いスーツに彼女は変わらず座っている。あと、何回この姿を見るのだろうか。そんなことを思いながら勇也は千歳に優しくキスをする。

細過ぎる身体はすっぽりと彼の腕の中におさまり、長いまつげはま

だ恥ずかしいのか小さく震える。

「で？本当のところはどうなの？」

「行ってほしくなんかないさ。何処にも。そんな所に行つて発作なんか起きればどうなる……。……。だけど、行きたいなら俺は普通に送り出すよ？」

好きだからこそ、相手の気持ちを尊重したいと思う。好きだからこそ、束縛したいと思う。好きだからこそ………。

ただ、純粹に一緒にいたいと思う。

「うん、考えとく」

「ここまで言わせておいて答えはそれかよ！..」

「もっと近づいたら言うよ！私だって困ってるんだから」

勇也が言っていることが充分に理解できるからこそ、彼女は余計な言葉を言わない。問い返したりなどしない。言わなくてもわかるから、言わない。だけど、それだと不安になるから時々声に出して聞くのだ。わかりきっている気持ちを。

「ま、いつか。じゃあ、近くなったらな」

信頼と

不安は

紙一重かもしれない

## 不安（後書き）

十八話です。次はもう夏休みを終えた後の話に入ります。二、三話無駄な話をしたらやっと本題に入ります。四月中は無理でもG・W中には終わらせたいと思っています。最後までお付き合いして頂くと嬉しいです。

## 体育祭

走って

争って

疲れる

体育祭

朝からばっちり体操着姿で決める。赤い八巻、短めの靴下、グラブシューズ。そして憂鬱な表情。

「ほら、シャキっとしてよ！いくら面倒だからって、そんな変な顔しないでよ」

「だって、お前の言う通りにほとんどの競技に強制的に出されたからさあ」

深々と溜め息をつく勇也に苦笑を向けて、千歳はプログラムを見る。クラスルームリレーはもちろん、綱引、障害物リレー、二人三脚、借物競争、そしてクラスの中で一番速い者を三人選んで行う選別リレー。計六つの競技に出なければならぬ。チエックをつけると半分は出ている。これは嫌になるわけだ。

「特に嫌なのは借物競争。毎年変な物が書かれてるとか……………」

「先生のカツラとか？」

「いや、確かに変な物ではあるけどそれはいくら何でも失礼だろ？」

「やっぱり？」

くすくすと笑う千歳に励まされたと気付いて、勇也は自嘲する。

「ほら、清水！彼女と遊んでないで準備手伝え！」

「あ？準備って生徒会の仕事だろ？当日になって何やってるんだよ」

仕方なく勇也は千歳と離れて体育祭の準備にかかる。そして、開会式、準備体操を終えてついに体育祭開始だ。

六つも掛け持ちする彼は最初から出番だ。足首を回しながら勇也は溜め息をつく。その様子を見兼ねて、クラスメイトの木之下が声をかける。

「おい、そう嫌そうな顔をするなよ。な？」

「まあ、やるからには全力でやるさ」

「彼女も見てるしな」

「るっせ！」

結果は誰もがわかるだろう。他のクラスよりも運動神経がいい者が多い勇也のクラスはどの競技でもほとんどが一位、もしくは二位だ。午前の競技を四つこなした勇也は流石にへるへるとなつて千歳の場所に戻つて来た。

「大丈夫？」

「んなわけないだろ」

「だよな」

あははと乾いた笑いを上げて、千歳は勇也の汗をハンカチで拭つてあげる。その光景を羨ましそうに男女が見ていたことを二人は知らない。

お昼はもちろん二人でお弁当を食べる。ちなみに勇也特製。

「って、だから何か立場違くない？」

「何が？美味しいね、勇也のお弁当」

喜ぶ姿を見ると何でも許してしまいたくなる。破顔して、彼女を見つめる。あと、何回このような時間を共有できるだろう。あと、何回この幸せそうな姿を見れるだろう。

自分の中にある不安は彼女が治るまで無くなることはない。それは彼女もそうだ。本人が一番怖いのに他の人がその不安を述べてはいけない。

ただ、勇也が気になるのは彼女が自分の教室にいる時のこと。彼女からあまり友達の話をしていないのだ。

ま、俺もしないけど……………。

お互い様なので聞いたことはない。二人は昼休みいっぱい午後のお祭について話し、次の競技のためそれぞれの応援席に戻った。そして、ついに勇也が恐れる借物競争の時間が来た。ルールは簡単、紙に書かれた物を持ってゴールするだけだ。勇也は覚悟を決めてスタート地点に向かう。

「用意、スタート！」

同時に数人の生徒が真ん中にあるボックスめがけて走り出す。勇也より先にその箱に手を入れた男子は書かれた内容に絶叫した。

「はあああ！？校長先生の眼鏡え！！」

校長先生、それはよく見るがあまり関りのない近づき難い存在。

「異性の髪の毛え！？」

「水ってどう持って行けばいいの？」

そこから聞こえる非常識な言葉に勇也は箱に手を入れることに戸惑う。思い切ってそれに手を入れれば一枚だけしか残っていなかった紙に触れる。

「……………」

無言でそれを読み上げて勇也はダツシュする。それぞれが混乱しながらも紙に書かれた品物を取りに行く。彼が向かうのは見るからに千歳の所。

「勇也？一体何て　　っ！？」

彼女の腕を引いて勇也は横抱きにする。突然の行動に彼女は状況が理解できない。軽過ぎる彼女を抱いて走るのは他愛のないことで、

勇也は恥ずかしがるといふよりむしろ嬉しそうに走る。

「ちよ、勇也？」

「ほら、これが書かれてた内容」

勇也は彼女に握っていた紙切を差し出した。そこには可愛らしい丸文字で『好きな人』と書かれている。片想い中の人やいない者にとつてかなり悩む内容だ。勇也は心底彼女持ちでよかったと思っただけ。一年前の自分だったらどうすべきか悩んでいたことだろう。

「でも、何でだっこして……………」

「お前走らせるわけにはいかないだろう？それに、やってみたかったから」

意地悪い笑みに彼女は顔を赤くする。もうすぐゴールだ。見れば勇也の他にも近づいてくる者が数人いる。

「ねえ、追い抜かれちゃうよ」

「んなことさせねえよ。せっかくお前が参加できるのに、負けるわけないだろう？」

不敵に笑った勇也の速度は一気に上がる。いくら軽いと言っても一人抱えた状態でよくここまで速さを出せるなあと千歳は感心する。走る時に感じる不規則な風、流れる景色、懐しくて目を細める胸が高鳴る。ほんのりと感じる温かさが心地好くて、自然と笑みがこぼれた。そして、言った通り彼は誰にも抜かされずにゴールした。

「楽しかったあ！あの紙書いてくれた人に感謝しなきゃね」

「はは、俺は明日絶対筋肉痛だよ」

疲労感でやつれてしまっている勇也は喜ぶ彼女に嬉しさを覚えつつも笑顔を作ることができない。極限まで体力を使った結果だ。

「お疲れ様」

「どうも。お前も楽しかったか？」

「うん」

本当、あと何回……………。

幸せの時ですえつきまとうその不安に勇也はいつまで耐えられるの

か。

彼女が笑う度に嬉しさと切なさが胸を締めつける。

彼女が微笑んで

僕は笑う

それしか今はできないから

## 体育祭（後書き）

十九話です。次は文化祭かも。借物競争、書いてある内容が面白いのだと楽しそうですよね。だけど好きな人は困りますね。いなかったらどうしましょう？次は二十話、早く終わらせたいなあ。

## 文化祭

恋人同士なら欠かせない

学校イベント

体育祭が終わってから早一ヶ月。あの行事が終わったら今度は文化祭。生徒達は勉強に追われながらも空いた時間で懸命に準備を進めていった。委員会、クラス活動、部活動などでそれぞれに行う店の準備を時間を裂いて行っていく。そして、待ちに待ったその日、彼らの気持ちを察してかとてもよい青空に。

「ねえ、勇也のクラスは何を出すの？」

朝からはしゃぎモードとなっている彼女は明るい声音で問う。勇也達のクラスは運動神経のいい者が多いだけでなく、多趣味の者も多かったため、文化祭で出す店をあれこれだともめ事となった。結

局、何の案が残ったかというと。

「逆転喫茶」

「何それ……………」

「男女の服装が逆転してるんだ。女はウェイター男はスカート」

「ぷっ、あはははははは！！！！もしかして勇也も着るの？」

「残念だったな、俺は料理作る係だから着なくてすむんだ」

冷や汗をかきながら答える彼に対して千歳は残念そうに頬をふくませる。多趣味の者が多いはずのあのクラスにも料理を得意としている者が四人ほどしかいなかった。そのため、もめることなどせずすんなりと料理役が決まったのだ。

「そういうお前のクラスは？」

「私？私の所はねえ、お化け屋敷！結構頑張って作ったから迫力あるよお！後で一緒に行こうね」

「そうだな。千歳は午前が店番だろ？」

「うん。ちゃんと勇也に合わせておいたよ。午後から自由。丁度行きたかったところがあるんだあ」

うきうきの千歳と教室の前でわかれて、勇也は自分のクラスに入る。女子は着替えに更衣室に行ってしまったため男子しかそこにはいなかった。店の装飾に忙しそうに動き回る彼らとは違う所で料理の下ごしらえに入る。後から三人も参加して、その場にはたくさんのお菓子の元となるものができた。

「あと焼くだけだな」

「うん。時間がかかりそうなものからオーブン借りて焼いてこよう」

借りられたオーブンは二台。少し心許ないが、仕方なく地道に焼いていく。

女子は着替えが終わり交代で今男子が着替えに行っていた。料理役でも一応衣装はあるため、勇也も着替えに出る。

文化祭開始時間は今から一時間後の十時。ケーキならぎりぎり四つか五つくらいはできるだろう。そう考えながら彼は衣装に腕を通す。

「ってか、何で燕尾なんだ？」

妙にこった服に思わず眉をひそめる。

とりあえず、服をきっちりと着こなして教室に戻り準備を再開した。

そして、文化祭開始。最初はイマイチだったお客の流れも今は行列ができるほど大繁盛だ。最初に作っておいたケーキがなければ今頃に合っていないかつただろうなあと思いつながらも盛りつけていく。午前の店番はあつという間に過ぎて、いつの間にか十二時を回っていた。

「勇也。頑張ってるう？」

調理場に顔を出した千歳に気付いて、勇也は手を止めた。お昼はご飯が食べれる店に行くためか、少しばかりお客の数は減っている。代わりの店番が丁度よく顔を出したので勇也はエプロンは取った。

「昼食べてないだろ？」

「うん、にしても何か気合の入った衣装だよな」

「衣装作りに凝っている奴がいたからなあ。これ全てそいつが作ったらしいぞ？」

「えっ？クラス全員分？」

「おう」

細部までこだわって作られたこんな衣装を一人で作れるものだろうか、と千歳は疑いたくなった。二人はそのままお昼を食べに他の店

に行く。焼きそば、ホットドック、アメリカンドック、フランクフルト、うどん、焼鳥など様々なものがそこから売り出している。どこもお客がいっぱい手で手が付けられない。

「どうする？」

「うーん、困ったなあ」

二人ともお腹はぺこぺこののだが、同じくらいお客が入っているのを見るとどこにも入りたいとは思えない。勇也はふとその客の中にクラスメイトの木之下を見つけて近づいた。

「よ、ホットドック食べるのか？」

「ああ。結構こんでるよなあ」

「なあ、俺達のも買ってくれないか？お前の分おごるからさあ」

「マジ？いーぜ。二つでいいのか？」

「ああ。サンキューな」

そんなこんなでご飯を入手して二人は食べる。文化祭、といってもありきたりな店が並ぶだけでそこまで魅力は感じない。人がこころまに楽しみにできるのは一緒にいる人達との会話を楽しめるからだ。二人は無意味に校内を回って様々な所を見た。そして、そのうちに

千歳の教室の前に辿り着く。

「そういえばまだ入ってなかったな」

「うん！丁度すいてるし、早く入ろう？」

勇也の手を引つ張って千歳は教室の中に入る。暗幕を上手く使って真つ暗になった教室を道確かめながらゆっくりと歩いていく。何も見えないが、手にはしっかりと彼女の温もりを感じる。

「ねえ、勇也」

「ん？」

「もし、こんな所で私が発作起こしたら……どうする？」

それは正直笑えない、悪寒が走るような質問。勇也は一瞬その姿を想像してしまい、足元が凍りついた。だが、歩くことは止めない。千歳の肩を自分の身体に引き寄せて勇也は唸るように呟いた。

「お前を抱えて、教室の出口を必死に探すさ。俺は………そんなことしかできないからな」

自分では千歳を救えない。そう思っている彼は悔しそうに表情を歪

ませる。

自分の無力さに自嘲している彼に気配で気付いたのか千歳は慌てて言葉を放つ。

「ごめん。そんな思いつめないで。ただ、助けてくれるって言う言葉は聞いたかっただけ」

助け。彼女はその言葉を彼の口から聞いたかった。勇也は出口まで連れて行くだけで助けたことになるのかと、それに驚きを示していた。そして、もう一度彼女に口を開きかけたその時。

「一枚…二枚…三枚…四枚…」

小さく、か細い女性の声音が響く。ああ、これかと一瞬びくついてしまった自分を情なく思った。

「五枚…六枚…七枚…八枚…九枚…」

うつすらと見える白い着物を着た髪の長い女性はゆっくりと二人の方へ向いた。

「おはしがなければ何もできないのよおおおおおおおお！…！」

「何だそれはあー!!」

言った時の顔の恐怖か、それともノリでか二人は走り出す。途中定番なこんにやくや白いお化け、火の玉などがあつたが全てスルー。光を見つけて教室の出口から廊下に出た。  
ムキになって走ったのがおかしくて、二人は一緒に笑い出す。

イベント

それは二人の気持ちを

確かめるものかもしれない

## 文化祭（後書き）

二十話です。文化祭ですね。だけど何か前置が長くて微妙な話になりました。次からやっ和本題に入ってきます。そろそろ終わりに近づいてきてちょっと安心していきます。

喧嘩

始めての

反発

文化祭も終わり、季節はいつの間にか秋になっていた。外を眺めれば木々の葉はひらひらと落ちていく。夕暮時の赤い陽の光はとても綺麗で、彼らの顔を赤く染める。じっと身じろぎもせずそれに見惚れていた二人は、手を握る。お互いの温もりがとても心地好い。

「ねえ、もうすぐ何があると思っ？」

「付き合ってから一年記念か？」

「もっと早くだよ」

思い浮かばなくて首を傾げた。その行動が可笑しかったのか、千歳はクスクスと笑いを漏らす。

秋、この季節に二人はあの屋上で出逢った。互いに同じ目的で、偶然に。不機嫌そうな勇也の顔も、いつも無邪気な千歳の顔も、今では破顔、悲愴、様々な表情を互いに見せ合った。そうして結ばれていく絆はとても深い。

「もうすぐ勇也の誕生日なんだよ」

「何だ、そんなことが」

「そんなことじゃないよ！ねえ、プレゼント何がいい？」

突然聞かれても欲しい物は容易には出てこない。顔をしかめて、唸る。ふと、どこか違うところに考えが向かったのか、プレゼントとは関係のないことを千歳に問う。

「修学旅行、どうするんだ？」

「……………、どうした方がいいのかな？」

困ったように苦笑して、千歳は床に視線を落とした。白い、ビニール的な病院の床はつまらない。憂鬱な時に見つめても、気は紛れない。気付かれないように小さく溜め息をついた。

四日間この地から離れ見知らぬ所で過ごす。これは自分にとってかなりの負担となる。おまけに勇也はその場にはいない。止めるべき

か、それとも高校時代の思い出として頑張っ て行くか、千歳は決め兼ねていた。

「行きたくないわけじゃない。だけど、行くべきかどうか迷ってる」

「行きたいなら、行けばいいだろう?」

「……………う、ん。だけど、それで発作が起きたら皆に迷惑がかかる」

「なら、やめればいいだろ?」

はつきりしない物言いに思わず彼は不機嫌になる。口調からそれを察して千歳も表情を歪ませる。

沈黙。重い空気に千歳は何も考えられない。今、何について話していたのかさえ忘れてしまいそうになる。勇也は一つ息をついて、努めて優しい声音で千歳に言う。

「千歳、それを決めるのは君だろ?俺はその結果を聞くだけだ。迷うのはわかるけど、決めなきゃ何も始まらないよ」

「 …… によ、結局何もわかってないくせに」

「千歳?」

今までにない千歳の重い雰囲気にも勇也は怪訝な顔をする。下を向い

たままの彼女の顔を覗くように身を低くすると、千歳は突然立ち上がる。

涙でぐしょぐしょになった顔で、必死に勇也の顔を見つめた。

「勇也に私の何がわかるの?! 発作をいつも気にして、やること制限されて、いつもいつもそれがストレスになってた! 好きな行事もそのせいで参加できない! 行きたいけど、それを考えると行かない方がって迷ってること勇也は苛つくかも知れないけど、私にとって重要なことなんだよ!」

「千歳?」

「何よ! そんな心底疲れたような顔で傍にいるくらいなら、いなくなればいいよ! どうせ私の傍にいるのはただ、私に同情してるだけだからでしょ!」

「  
っ!」

はっとして千歳は口を押さえる。今、自分は何を口走ってしまった? と、後悔で更に表情を固くした。明らかに傷付いた表情の勇也は、ただ哀しそうに千歳を見ていた。一度口を開いたがすぐに閉じてしまふ。

「いつも、いつも、勇也は私のために無理してくれる。だけど、それは逆に辛い」

嗚咽を抑えながら紡がれる言葉に勇也は齒を食いしぼる。  
この雰囲気、この様子、この言葉。これは別れの時のものだ。背筋  
がぞつと凍える。

「だから、もう、終わりにしよう?。」

言葉にしてしまったそれ。もう引き戻せない。今まで光にすがって  
生きてきたのに、自分から簡単に手放してしまうのか。心の中で自  
分を嘲る。

「それは、俺が信じられなくなったからか?。」

冷たく放たれたそれに千歳は息を飲んだ。哀しそうに歪められた彼の  
表情はそれでもまだ何かを堪えてるようで。よく見れば小さく肩  
を震わせていた。

千歳は硬直した身体を何とか動かして、首を横に振る。目が、見れ  
なかった。

「確かに俺は千歳の気持ちなんか理解できない。千歳だけじゃない。  
友達も、先生も、親でさえも気持ちなんか理解することなんてでき  
ないし、できるものでもない。それは、誰だっで一緒だ。千歳だっ  
て俺のこと何も理解してない。」

本当のことだ。なのに、それがとても苦しい。はっきりと言われた

ことが、当然のように言われたことが。だが、自分はもつと彼を傷付けた。そう、思ったら何も言えない。

「だって、そうだろ？俺が無理に千歳に合わせてると思ってるんだから。俺が同情で千歳と付き合ってると思ってるんだから。それだけで俺のことを理解してないってことわかるさ」

勇也は千歳に手を近づける。一瞬、ビクリと肩を震わせたが、予想していたことは逆に一瞬にして身体が温かいものに包まれた。彼はいつの間にか堪えていた涙を流して、必死に訴えた。

「俺は一年前まで人なんか信じられなかった。学校では上辺だけ、その場だけの関係が広がり、親は親でしらけた関係だった。何をするにも本気になれなくて、長続きすることはなかった。そんな俺が同情だけでお前のためにこんなに尽くすと思うのか？こんなに一緒にいれると思うのか？」

一年、それはまだ十七歳の勇也にとって気が遠くなるほど長いもの。その間ずっと彼女について、彼女を心配して、彼女を支えて。そんなこと今までしたことがなかった。するとも思っていなかったくらいだ。

抱く力を一層強くして、勇也は言葉を繋げる。痛みには思わず顔を歪ませて、千歳は彼の服を握りしめる。

「阿呆か！いられるわけないだろう！いつも言ってきた。俺は誰よ

りも何よりも大切だって」

「好きなんだ、千歳が。愛しいんだ」

彼女の瞳から流れる涙は勇也の服に吸われていく。小さく、何度も  
呟かれる謝罪の言葉に勇也は同じくらい何度も頷いた。悪気があつ  
たわけではない。ただ、自分の中にあるストレスと不安に耐えられ  
なくなっただけだ。そして、最近疲れ気味だった勇也を心配してい  
るだけ。

わかってる。けどそれでも放たれた言葉は深く心に突き刺さった。  
宥めるように彼女の背中を撫でて、勇也は落ち着かせるために彼女  
の耳元で口を動かした。

「別れるもんか。俺は絶対千歳を手放さない。ずっとずっと一緒に  
いるんだ」

一  
つ

消えることなく

不安は募る

## 喧嘩（後書き）

二十一話目です。初めての喧嘩？なのかな。わかりませんが、少し切羽詰まった様子を書いてみました。これから先このようなことが増えるかもしれません。どんどん話は病気に近づいてきます。次は勇也の誕生日です。

## プロポーズ

誕生日

だけど貰うんじゃない

受け取ってほしい

この言葉を

身体を冷やすような冷たい風が吹く。久々に屋上に来た気がした。二人は上着を来た姿でその場に出た。既に木の葉はほとんど落ちてしまい、風景は淋しいものになってしまった。勇也は千歳に手を差し延べる。彼女はそれを素直に受け取って、手を繋いだ。

「本当によかったのか？」

「修学旅行のこと？うん、私は勇也と一緒にいる方がいいし。それ

に発作が起きるのは怖い」

修学旅行は結局止めて、今休暇をとってしまっている。発作は最近それほど起きてはいない。そのため、いつ起きるか起きたらどうなるのかがとても怖い。

もうすぐ十二月。つまり今年が終わる。医者が言った言葉を思い出して勇也は瞳を曇らせる。

「このままもしないで今年を終えるのか？」

「その方が、長生きできるかもしれないじゃない」

語尾が小さくなる。勇也の手をきつく握り締めて、千歳は顔を伏せる。

何もしない方が長生きできる。それは確かにそうなのかもしれない。だが、諦めたような呟きに勇也は胸が痛かった。この言葉は彼女の精一杯の気持ち。少しでも長く、少しでも幸せの時が続くようにという祈り。

「そんなことよりも誕生日プレゼント何がいい？前みたく行動をプレゼントしようと思ったんだけど、全く考えられなくてさあ。よければこれから買いに行こう？」

話をそらして、彼女は明るく言った。今日は勇也の誕生日。屋上から下りようと急かす千歳を勇也は手を引いて静止させた。

彼はゆっくりと首を振って、彼女を元の場所に戻させた。

「物じゃなくて、行動の方がいい」

「何がいいの？」

「手術、してよ」

手術、それは心臓病を治すということ。千歳は自分の耳を疑った。だが、彼の瞳は疑わせてはくれなかった。真っ直で、純粹な瞳。決して冗談を言う時の顔ではない。そもそも勇也は病気に關して冗談を言う人ではない。

一瞬、沈黙がその場を支配する。喉が張りついて上手く声が発せられない。

「このまま何もしないで死を待つよりも、俺はこれから先千歳という可能性を選びたい」

「でも、……。……。体重が」

「わかってる。だけど、やってほしいんだ。今年中に、どうしても」

目線が外せない。痛いほど感じる彼の視線が怖かった。優しく握られているはずの手も何故が痛かった。

乾いた唇はまだ動かない。硬直した身体を風が容赦なく吹き付ける。冷えていく中でその手だけが暖かい。

しばらくたって、やっと彼女は重い口を開いた。

「何をしてくれる？」

「え？」

「勇也の誕生日プレゼントとして手術するとして、それ相応のこと私の誕生日にしてくれるんでしょ？」

見返りが欲しいわけではない。ただ、手術する時に安心できる物が欲しかった。

儂く笑って、勇也は握っている手を持ち上げた。ポケットから何かを取り出したかと思えば、それを千歳の指にはめた。キラリと輝く小さな宝石がついた綺麗な指輪だった。それごと彼はキスをする。

「手術する前に、俺と結婚して下さい」

彼女は口元を手で押さえる。溢れ出す涙は止めることなどできず、そのまま膝を折って崩れてしまった。

小さく肩を震わせる。涙は決して哀しみものではない。幸せ過ぎ

ることが起きてしまったから流れたのだ。勇也は彼女の肩を抱き、  
嗚咽を漏らさないようにした。

「ありがとう……………」

「それはいいってことなのか？」

微妙な返事に眉を寄せる。千歳は思わず笑って、泣きながら頷いた。

「はい。喜んで」

「よし、これでいいだろ？」

屋上で二人は出逢い。

屋上で恋人となり。

屋上で将来を誓った。

二人は高校を卒業の前に夫婦になることを決意してしまった。しかし、それは本当に可能なのか。この時そんな不安も感じることなく、ただ結婚という互いの支えに喜んだ。

早過ぎる決意におそらく誰もが反対するだろう。だけど、二人は揺るがない。誰よりも大切に誰よりも想う互いのために周囲の声など聞かないだろう。

君は約束してくれた

最後の希望にすぎってくれと

## プロポーズ（後書き）

二十二話目です。高校卒業の前に二人は結婚しちゃうそうです。何だそりゃ。と私は自分で打ちながら思ってしまった。はは。現実ではあまりないですよ。高校生夫婦なんて。この二人の場合まだそれが実現するとは限りませんが。そろそろクライマックスに入ります。続きも読んで頂けると光栄です。

ありがとう

初めて

向き合った

心臓が痛いくらい鳴っていて、身体は冷えている。今日は日曜日。両親が珍しく家にいるその日、勇也は決心して二人のいるリビングに入った。母親は朝食に使ったお皿を洗い、父親はテレビを見ていた。

音をたてないように扉を閉めて、唾を飲み込む。逃げ出したい衝動を何とか堪えて勇也は父親が座る向かいに腰をかけた。

「父さん、話があるんだ」

「何だ？お前が私に話なんて珍しい」

少し面倒そうに顔をしかめる父親に一瞬怯むが、勇也は奥にいる母親に視線を送る。

「母さんも、聞いてくれないか？」

「え？はいはい」

手を拭いていそいそと父親の隣に座った。テレビを消して、シンとした空気の中三人は向かい合う。勇也はそらしていた視線を二人に向けて、口を開いた。

「俺、この前の自分の誕生日に千歳にプロポーズしたんだ」

突然で現実味のない言葉に二人は何のことだか理解できなかった。プロポーズなど、高校生の口から出るとは思っていなかったからだ。だが、勇也は構うことなく言葉を紡ぐ。

「無理を承知でお願いします。あいつの誕生日に結婚させて下さい  
」！  
」

今まで彼がここまで真剣な顔で親と話したことはなかった。それはどれだけ本気なのかを示している。だが、逆に二人はそれを了承するわけにはいかない。

「何を馬鹿なことを言っている！」

「そうよ、勇也。貴方はまだ高校生なのよ」

二人がそう言うのは当たり前で、何の言葉も返せない。だけど、このまま食い下がるわけにはいかない。手に必要以上に力が込もり、勇也は震え出しそんな身体を何とか保つ。

「本気なのはわかった。だが、結婚はもつと落ち着いてからでも」

「それじゃ駄目なんだ!」

焦って声が裏返った。思わず立ち上がって勇也は必死に二人に叫ぶ。

「今年中じゃないと駄目なんだ! あいつには今、結婚しかないんだ! 早く、早くやらないと……」。結婚もできなくなっちゃうんだ」

肩を上下させる彼に二人は顔を見合わせた。焦燥している勇也は最後の手段として結婚を切り出したのだろう。今まで両親と話しすらほとんどしなかった彼が、大事な話でさえ省いてきた彼が、真正面に立って訴えてきている。

二人にも彼の真剣な気持ちは理解できた。

「どついでと?」

事情も知らないままだと話にもならないと察した母親が優しく聞いた。勇也は呼吸を落ち着かせて、もう一度腰をかけた。一つ、一つ、彼女の病状のことを告白し出した。

二人は途中で口を挟むことなどせず、神妙な顔でそれを聞いていた。話終えた時、深く考えるようにしばらく動かなかった。

「お前、この前合格した大学受けたのはもしかして彼女のためか？」

「え？」

推薦をもらって受けた大学はこの前見事に合格した。両親には大学をそこにするしか言ってなかった。理由も、状況も何も。

勇也はゆっくりと頷いた。父親は深々と溜め息をついて、勇也に向き直る。

「高校生なんて学生の人に結婚なんかするものじゃない。どうしてだかわかるか？」

「経済的自立と精神的自立がまだだからですか？」

「そつだ。それじゃあ、彼女を支えることなどできはしない」

「……………じゃあ、父さん。それがなければどうして結婚しちゃいけないんですか？」

真面目な顔で問い返されたそれに父親は眉をひそめる。彼は曇りない瞳で言葉を繋ぐ。

「俺は、今すぐにも二人で暮らしたい。二人で生きていきたいと言っているわけではありません。今、彼女が手術に立ち向かっていける勇気のために結婚という形が欲しいんです。支えが欲しいんです」

彼女が逃げ出さない、彼女が安心できるものが欲しい。例えそれが形だけのものでも。それが今はそれほど関係ないものでも。自分が与えられるものは何だってあげようと、決意したから。

「お願いします！結婚を許して下さい！」

「……………お父さん」

母親は父親に判断を任せた。しばらく目を閉じて悩んでいた父親は勇也の顔を見る。最近まで何の感情も出さなかった何もない人間だった彼は、今では一人の女性のためにここまで熱くなっている。人間らしい姿を見れたことに内心で嬉しく感じた。

「幸せにする覚悟はあるのか？」

「はい」

「一生愛す覚悟もあるのか？」

「はい」

「そこまでして彼女を助けたいのか？」

勇也は助けるといふ言葉に首を傾げる。何か違う気がする。そう思  
って考えた。

「助けるんじゃないで、支えたいんだ。彼女が大切で、彼女を失い  
たくなって……。だから俺のために、自分のために彼女を生かした  
い。俺にとって彼女は人生の全てだから。死ぬまで彼女を支えてい  
きたいんだ」

それを聞いた父親は苦笑を浮かべた。暖かい、本当に優しい笑顔に  
目を瞠る。父親がこんな風に笑うのは非常に珍しい。もしかしたら  
今まで見たことがないかもしれないと思うほどだ。

「相手のご両親が納得してくれたら、私からは何も言わない。好き  
にきなさい」

「本当？」

「ただし、ちゃんと大学は卒業して、ちゃんとした所に就職しなさい。それを約束できるなら大学に入ってから二人で暮らすことも許してもいい」

冷えていた身体は次第に暖かくなってくる。目頭が熱くなり、こぼれそうになるものを必死に抑えた。だけど、それは無駄な努力で、結局頬に温かい滴が滑り落ちる。

「

ありがとう。父さん、母さん」

本当に、こんなに長く話したのは久々で。二人がここまで真剣に話を聞いてくれるとは思っていなかった勇也は、予想以上に自分のことを千歳のことを考えてくれた二人に感謝した。心からのお礼は二人の胸に響いて、その場を和ませた。

ありがとう

呪文のようなそれが

自然と口からこぼれた



## ありがとう（後書き）

二十三話目です。かなり無理矢理OKさせてしまいましたが、いかがだったでしょうか？実際、両親に高校生が結婚したいなんて言えませんよね？勇也はかなり頑張ったと思いますよ。

ありがとう、この言葉はかなり奥の深いものだと思います。言えばそれだけで人を幸せにする力がある。もちろん、心から言えばの話ですけど。皆さんもたくさん使っておきましょう！

## 婚約

今度は

相手側

「勇也！早く早く！」

手を振る彼女に勇也は緊張を隠せずに近寄る。今日は千歳の家に向かっていている。理由は結婚について千歳の親に話をしに行くためである。彼女の家に上がったことがないのも事実だが、結婚する話をしなければいけないということに極限まで緊張していた。

「大丈夫？顔青いよ？」

「自分の親に話すよりも緊張することがあるとは思わなかった」

肩を落とす彼の背中をさすって、千歳は元気づける。その手には指輪の感触があり、自然に口元が緩んだ。プロポーズしてから彼女は明るい。それが嬉しくてプロポーズしてよかったと心から思った。

「大丈夫だよ。絶対に結婚できるから」

微笑んで見せると彼女は顔を赤くして頷いた。正直、ここまで信頼されて近寄られると時々困ることがある。そんなこと彼女は気付いていないんだろうなあと溜め息をつきながら彼は千歳の家に向かう。

「千歳の両親で」

「お父さんはいないよ。勇也見たことないでしょ？」

「え？いないの？そういうえば千歳が発作起こしても来るのはおばさんだけだったなあ」

「うん。私が小さい時に病気で死んだの。だから、お母さんは私を女手一つで育ててくれたの」

だから、ほとんど見舞いに来れないのか。

父親がいないということに多少緊張がほぐれたが、根本的な緊張はなくならなかったため、気が重いのは変わらない。

覚悟を決めて、勇也は表情を変える。真剣な眼差しを千歳の家に向けた。千歳は思わず微笑んで、同じように自分の家を見つめる。

「勇也は、逆境に強いよね」

「何だよ、いきなり」

「すごいなあって思って。私の病気のことを聞いた時も、意を決して私に話してくれたし」

「それは病気を持つ本人じゃないしな」

「それでも、多分私にはできなかった」

恋人が、大切な人が今年中に手術しなければ死ぬと聞かされれば。どんな人でも迷って、哀しんで、判断をにぶらせる。それなのに、勇也は戸惑いながらもはっきりと彼女に告白した。それが嬉しくて、強い意志を羨ましく思う。

いつの間にか彼女の家の前まで来ていた。今千歳は病院にいるから、母親一人でこの一軒屋に住んでいるのかと思うと淋しく思うくらい立派な家だ。勇也は千歳に視線を送る。彼女は家の扉に手をかけて開けた。

「でも、いくら支えがあっても俺はお前みたいに病気に立ち向かうことなんてできなかつたかもしれないと思うよ」

「え？」

ぼそりと耳打ちされた言葉に目を瞠る。だが、会話は家の奥から現われた母親によって中断される。軽く挨拶を済ませて二人は家の中に入った。

「突然すみません。お邪魔して」

「いいのよ。勇也君なら大歓迎」

「お母さんいつからそんなに勇也と仲良くなったの？」

「あら、妬いてるの？」

「ち、ちがつ！もう、変なこと言わないで！」

和やかな会話をしばらく続けていたが、勇也は真剣な表情を出して話を変えた。

「それで、今回話したかったことは」

「ああ、そうだったわね。一体どうしたの？」

一回千歳の顔を覗いて、母親に視線を戻す。言いづらくても自分が言わなければならない。そう、何度も自分を叱咤して勇也はやっと口を開いた。

「千歳を……。千歳と結婚させて下さい」

「いいわよ」

あっさり過ぎる返答に二人の目が点になった。今何と言った？自分の耳を疑ってしまっくらい呆気なくて、拍子抜けをしてしまった。にこにここと無邪気な笑顔を向ける母親を信じられないという顔で見つめる千歳。無意味に瞬きを繰り返す勇也。

「へ？あ、あれ？」

「いいわよ。思うようにしなさい。貴方達のことだからちゃんと覚悟も理由も揃ってるんでしょう？それなら私が口出すことは何もないわ」

「本当にいいの？お母さん」

「貴方は結婚したいんでしょ？」

「う、うん」

暖かい笑みを浮かべて千歳の頬を手で包む。一人の娘を思う母親の顔で、優しく頬を撫でていく。小さな彼女の頭を胸に押し付けて、風のような声音で言った。

「私は貴方が幸せならそれでいいの」

「お母さん、ありがとう」

母子のやりとりに勇也が瞳を潤ませて、感動していた。

あっさり過ぎるほど簡単に決まったが、おそらく母親はずっと前から覚悟していたのだろう。勇也が現われた時から、恋人になった時から、ずっと。

風が冷たくなり始めたこの時期、二人の結婚が決まった。

ひらひらと落ちて来る枯葉を手で受け止めて、千歳は勇也に笑顔を向ける。

222

「これで、私達婚約者なんだよね？」

「ああ、そうなるな」

「私の誕生日に籍をいれるんだよね？結婚式……………は自立してからにしようね」

「ああ」

少し残念そうに呟いた彼女に思わず噴き出して、勇也は彼女の頭を撫でる。柔らかい髪は彼の鼻を心地好くくすぐる。細過ぎる身体は

今も昔も変わらなくて、  
だけど彼にとってはこれがもう基準となっ  
ていた。

「愛してる」

「ふ、キザ。私も愛してるよ。勇也」

誰よりも

何よりも

君が大切だから

君が

好きだから



## 婚約（後書き）

二十四話目です。三十話で終わるのか危うくなり始めました（汗）  
いや、頑張って終わらせませす！次は結婚になるかな？その次が……  
…。  
この調子なら予告通りG・W中に終わりそうです。頑張ります。

## 限られた時間の中で

永遠の恋人から

永遠の夫婦へ

季節は冬。二人は既に付き合ってから一年を迎え、今日は約束の日。そう、千歳の誕生日だ。婚姻届を出して、見事夫婦となった二人は病院のあの屋上へ来ていた。冷たい風が二人を吹き付ける。陽は既に沈みかけ、星がチラチラと覗いている。

「夫婦に………なっただよね？」

「ああ。夢じゃないぞ？現実だ」

奥に足を進めた勇也は振り返り、微笑んだ。婚姻届を出すだけで夫婦となれる。紙一枚の関係。けれど、それは二人にとって何よりも

尊い関係で。彼は千歳に手を差し延べる。彼女は素直にそれを受け取って、少し冷えた手を添える。彼の腕の中に引き寄せられたと思ったら、勇也は千歳に白く透ける布を頭にかける。

「実感したいだろ？」

「え？あ、うん」

「ここで、結婚式あげようぜ」

今日は丁度彼女は白い落ち着いた服を着ていて、勇也も崩れた服装ではなかった。頭にかけられた布は結婚式に被るあれを連想させ、彼女をその気にさせる。嬉しそうに微笑んで、頷く。

出逢いは屋上で。

「一生、千歳を愛し傍にいたいことを、誓います」

永遠の恋人を誓ったのは屋上で。

「一生、勇也を愛し……………」

そして今、その屋上で永遠の愛を誓う。

「ずっと、ずっと傍にすることを誓います」

永遠の恋人から、永遠の夫婦となる。

小さな輝きに見守られながら、二人は甘いキスを交わす。視線が合えば、勇也は切なそうに表情を歪ませて彼女を抱き締める。細過ぎる彼女の身体は一年前から変わることなく、身長も、髪も、全てが勇也にとって愛しかった。

「痛いよ。勇也」

「絶対だぞ？誓いだからな。ずっと、ずっと……」

「傍にいるよ。絶対」

確かな支えを手に入れた二人は、今までで一番高い壁に挑むべく、互いの温もりを確かめる。どんなことがあっても、どんなことが来ても、この温もりを忘れないように。

永遠なんて不確かで、あやふやなものを信じて。夜空の下で、いつまでも二人は抱き合っていた。

そして、

君はあの部屋へ

入って行く

夫婦になってから一週間。千歳は手術着に着替えていた。心臓が高鳴る。落ち着かせようと頑張るが、それは無意味なこと、逆に緊張が高まっていく。身体を固くしていく千歳の肩を勇也は引き寄せた。

「怖いか？」

「当たり前でしょ？」

「うん。それでいいよ」

意味のわからない慰め方に千歳は表情を歪ませた。いつもよりも優しい声音で彼は言葉を紡ぐ。

「恐怖があるのは、まだ希望があるから。希望が何もなければ諦め

がついて怖さは何も感じないけど、希望が少しでもあるから、怖いんだ」

人は恐怖に勝って、希望を掴む。そう言えば格好いいが、恐怖は勝つものではなくて認めるもの。恐怖が出てくるのはその先に光が少からずともあるから。真つ暗な道を歩いていれば、麻痺して何も感じなくなる。

「そっか、そうかもしれないね」

「大丈夫。俺は千歳の中にいるから」

「もう、現実的なのか、空想的なのかわからないね。勇也は」

恐怖を認めて、それごと受け止めれば、もう何も怖くない。彼女の温もりを感じていた勇也は不意に何かに気付いて、千歳を放した。顔を赤くして、口をパクパクしている。

「勇也？」

「おま、何も……………」

勇也が言おうとしていることを察して、千歳も顔を赤くした。手術着、ということとは簡単な構造の服一枚を羽織っているだけで、他には何もつけていないのだ。そんな恰好の彼女を抱き締めた勇也にあ

れが当たったのだ。

「ごめん、そうだったけな」

「もう、そんなに赤くならないですよ！こっちまで恥ずかしくなっちゃうじゃん！」

「いや、だって……あれはやばいって」

違うことで二人の心臓は高鳴る。思わず千歳は嘔き出して、笑い始める。緊張は嘘のように引いて、これから手術するなんて思えないくらいリラックスしていた。勇也も彼女につられて笑う。

「三島さん。そろそろお時間ですよ」

手術の時間を知らせに看護師が入ってきた。千歳はベットから腰を浮かせて、看護師についていく。

「千歳………」

話すことなどないのに、自然と口から名前が出た。彼女は綺麗な笑顔で勇也に向けて、明るい声で言った。

「行ってくるね。帰ってきたら、そういつこと………もっとしてもいいよ」

「ばー！そんなこと簡単に言うなよ！」

「勇也だから、言えるんだよ。勇也だから、信じて行ってくれる。………行ってきます」

どくん

この時、彼の背筋に悪寒が走った。けれど、それを悟らせないよう  
に努めて、彼女と同じくらい綺麗な笑顔を作る。そして、頑張れる  
ように、帰って来れるように、優しく穏やかに言い放つ。

「行ってらっしゃい」

高校生という

大人でも子供でもない

その『限られた時間の中で』

僕達は愛し合い

夫婦となつた

僕達のその刻は

終わりを告げた

## 限られた時間の中で（後書き）

二十五話目です。次がやつと最終話です。ここまで読んで下さった皆様。どうか、最後までお付き合いですべて下さい。なお、最終話が終わっても二、三話番外編を書くつもりなので、そちらもよろしくお願ひします。

一生、一緒に

あれから

一年

ざわざわと騒がしい教室に唯一人ぶ厚い本を読み耽る彼は、大学に通うようになった勇也。教室の隅にいた女子は彼の方をチラチラと見て、ひそひそと話している。何気にその声は勇也の耳に入っているのだが、聞こえない振りをする。

「ねえ、勇也君って静かだよな？」

「成績よくて、運動できて、あと料理もできるらしいよ」

「皆好きになるはずだよねえ。だけど誰の告白も受けないんだよね」

「噂では既に恋人がいるとか」

「あ、恋人じゃなくて妻がいて同棲しているとか」

「他には恋人はいただけど亡くなったとか」

勝手に盛り上がっていく彼女達の噂話に思わず苦笑する。どこからそんなものが流れているのか、と聞いてみたくなるほど孤立した存在になっているらしい。本を閉じて鞆にしまっ。授業までまだかなり時間がある。

ノートと教科書を取り出して、今日の予習をし始める。大学卒業後、少しでもいい就職につこうとかなり無理をして勉強しているお陰で大学では一、二を争う学力を身につけた。

「でも、そうだとしたらその人のことを今でも愛しているってこと？」

「すっごおい！カッコいい！！」

すらすらとノートにつづっていた手の動きが一瞬止まる。淋しそうに目を細めて、彼は息をついた。

亡くなった者を一生愛すのと、一生忘れられないのでは全く意味が違う。と、冷めた思いを頭の中で浮かべる。

「所詮、噂。されど噂、かな。結構的ついてるじゃん」

彼女達には聞こえないように小声で、勇也は呟く。くるくるとシャープペンを回して、教科書を無意味に眺める。あの二人のせいにする

るわけではないが、勉強する気がなくなってしまった。

「勇也！何か女の子が呼んでるぞ」

教室の外から友達が叫んだ。立ち上がって向かう前に勇也を呼んだ人物が姿を見せる。黒い、長い髪を揺らして、勇也の顔を見つけた彼女は小さなバツクを上に掲げて声を張り上げた。

「勇也！お弁当忘れてったわよ！もう、せっかく作ってあげたのに！」

「千歳！？よくここがわかったなあ」

彼の表情は一変して、学校では決して見せない柔らかいものとなる。二人の女性との横を通り抜け、彼女の元へ走り寄る。持って来てくれたお弁当を受け取り、彼女をここまで連れて来た友達がニヤニヤとした顔をしているのを見つける。

「君、可愛いよね？勇也とどういう関係？」

「え？聞いてないの？」

「言っていないからな。この学校で千歳のこと知ってる奴なんて一人もいないぜ？」

意外な言葉に彼女は目を丸くする。周りを見渡してみれば、じろじろと興味津々で彼女を見てくる人がほとんどだった。困ったように勇也に視線を送る。

「全く。どうして勇也はそういう面倒だと思ったことすぐに放つぱり出すの？この教室のことももしものことを考えて私に教えておいていてもよかったでしょ？」

「いや、まさか俺が忘れ物するとは思ってなかったし。そういうば今日母さんは？」

「家でテレビ見てるよ。いつも働きに出てる人を心配して家から出られないとか可笑しいでしょ？気にし過ぎよ！」

「はは。それもそうだな」

あれから一年。彼女の手術は見事に成功し、順調に回復した。今はもう普通の人と変わらないくらい身体はぶっくりとして、笑顔も柔らかい。勇也は今、千歳と母親の家に上がり込み、三人で暮らしている。大学に入ってからその学校に同じ高校の者がいなかったことをいいことに、彼は千歳のことを何も言わずに今までできた。それでもどこからか情報が流れてきたのかあの噂だ。

「え？無視？なあ、勇也！どういう関係なんだよ？」

ざわざわと騒がしくなり始めた周囲に勇也は面倒そうに頬を掻く。それを見兼ねた千歳は一つ、盛大な溜め息をつく、クルリと身を回してにっこりと笑った。

「初めまして。私、清水千歳十八歳。勇也の妻です。よろしくお願  
いします」

もちろん、その場は更に騒がしくなったことは言うまでもない。勇也は無理矢理彼女を連れて校舎の外に出る。それでも野次馬はあまり減らなかつたが、気にせず彼女を抱き締めた。

「ちよ、勇也？」

「いや、何か嬉しくてさ。ここで千歳と会えるのが」

「馬鹿。ねえ、今日が何だか覚えてるでしょ？」

「結婚記念日だろ？ばっちりさ」

嬉しそうに頬を染めて、千歳は勇也の頬にキスをする。驚愕して、茫然としていると彼女は数歩離れた場所で振り返る。

「今日、ご馳走用意して待ってるからね」

「ああ。楽しみにしているよ」

手術してから彼女は大変な思いをした。今こうして家で暮らしていることが時々夢なんじゃないかと思うくらい、この時を想像するのに大変な日々で、辛いものだった。けれど、夢ではなく現実でここにいる。

彼女の温もりが消えないで、あり続けることが本当に嬉しい。夜、一人で感謝して泣くほどだ。

未だに騒がしい教室に平然として戻り、彼は自分の席に座る。鞆から小さなノートを取り出して何かを書き始めた。

高校を卒業して、子供みたいな考えは消え始めたが、永遠という言葉は未だに使う。それを信じているのかは彼自身にもわかっていない。ただ、あの時の決意を変えないためにも、あの時の気持ちを忘れないためにも、使っている。

限られた時間の中で感じた気持ちは二度と戻っては来ないから。今ある気持ちも、思いも、前のものとは少からずも違っているから。せめて、忘れないように。

今でもはつきりと思い出せる

一年前のあの手術

八時間という大手術を終えて

重たそうな瞼を必死に開けていた彼女は

僕にこう言ったんだ

『ただいま』と

授業が終わると早々に支度を整えて、勇也は教室に出る。いろんな人とすれ違い、ぶつかりそうになりながらも、走る彼をある女生徒が声をかける。

「勇也君！あの女の子が妻って本当なの！？」

その言葉を聞こえない振りで見無視することもできたが、勇也はクルリと走りながら身体の向きを変えて、笑顔で答えた。

「本当だよ！千歳は俺の永遠の妻さ」

『永遠』。あの頃の気持ちは忘れないために、使う。けれど、今でも感じているのも本当で。だからこそはっきりと言える。『愛してる』と。

あの時、僕は思わず泣きだした

震える小さな声音で必死に君に返した

『おかえり』と

勇也は走り続けるには少し長い距離を汗もかかずに走り抜ける。空は既に暗くなり始めていたが、それでもまだ五時くらいだろう。自分の左手を見ればそこには何の飾りもない銀色の指輪。もちろん、それは彼女の手にもある、結婚指輪。見慣れた家の屋根を見つけて、彼の走りの速度は上がる。木像の扉を開けて、勇也はリビングに着いた。まだご飯の準備をしていた千歳は間抜けな顔を彼に向けていた。けれど、すぐに微笑んでその言葉を放つ。

「おかえり」

「ただいま」

僕達は互いに互いが支えで

けれどそれはとても淋しいことに気付いた

お互いに一人しか支えがないことが

だから、これからは支えを少しでも増やそうと頑張っている

心からの気持ちを伝えられる人を

ただいまとおかえりを言える存在を

増やそうと…

でも、どんなに増やしても変わらないことは

どんな支えよりもやはり互いが一番の支えであること

「あれ？そういえば母さんは？」

「買い物に行ってる。飲み物がなかったから」

エプロン姿の千歳を思わず抱き締めながら、勇也は目を閉じる。  
彼女は首を傾げながらも、嫌がることはしない。

「どうしたの？」

「いや、一年前のこと考えてた」

風が冷たくなったこの季節。思い浮かべることが二人とも同じ。千歳はうん、とだけ呟いてそれきり黙り込んでしまふ。勇也は歯切れ悪く小さく彼女の耳元で囁いた。

「なあ、今夜………駄目か？」

何を言いたいのか何となくわかる。千歳は顔をこれ以上ないほど赤くして、彼の服を掴む。

「優しくね」

同じく顔を赤くして、二人はキスを交わす。

僕らは歩き続ける

あの限られた時間の中のことを心に止めて

無限に広がるこの道を

二人肩を並べて

一生

永遠と

愛という言葉を

ずっと感じていられるように

君と

一緒に



一生、一緒に（後書き）

最終話です。ここまでお付き合いして頂きありがとうございます。連載物初めて終わらせました。二十六話というのは私にとってまだ短い方だなあ、とすごく感動です。いつも長々と話を続けてしまうので。

最終話になったのに、完結になってないのはこの前予告した通りこれから少しだけ番外編を書くからです。千歳視点の話を二話ほど書きたいと思います。

感想、評価、読んでくれたついでに下さると非常に嬉しいです。他の作品も興味があったら見て下さいね。

三亜野雪子

番外編 一目惚れ？

いつでも

貴方が傍にいる

扉がかすかに閉まる気配で目を覚ました。寒い、温もりを探して手を延ばす。ふと、心地好い暖かさを持つものに身体を引き寄せられた。ほっと安心して、再び眠りにつこうとする。が、彼女の目は逆に冴えてしまった。目の前には引き締まった胸、安心する温もりを持っていたのは勇也の身体だった。

そうだ、昨日……………

昨夜のことを思い出し、思わず顔を赤くする。穏やかに眠りにつく彼の顔を嬉しそうに眺めて、彼女は抱き締めた。触れている所が熱く感じた。けれど、それも心地好くて。

勇也は気付いてないんだろうな

私がどれだけ救われていたか

千歳は二年前のことを思い浮かべる。まだ、勇也に出逢う前。支えがなくて、不安で仕方なかったあの孤独な時間のことを。

あの病室からいつも、空を眺めていた。流れていく雲は妙に早く感じて、目を細める。母親が隣で花瓶の水を変えていた。

「何か欲しいものがあつたら言つてね。あ、今度千歳が好きな食べ物」

「もう、いいよ！ご機嫌取りなんかしないでよ！」

何もかもに苛つきを見せた。個室の病室にいても医師や看護師、母親が機嫌を伺いに、具合を伺いにやってくる。まるで、彼女がすぐに死ぬような扱い。

もう、うんざり

本当に一人になれる場所を探した。外も中も、それらしき所はどこにもなかった。諦めかけていたその時、彼女の視界に上にかかる階段を見つける。思わずそれを上つていけば、そこは屋上と繋がっていた。期待に胸を膨らませた彼女の顔はすぐに暗くなる。見れば既に誰かいる。

やっと見つけたと思ったのに

肩を落として、帰ろうと扉に手をかける。だけど、すぐに顔は先客の者に向き直る。

千歳はあの顔を知っていた。真っ直に空を眺める彼のその目を。いつも、いつも、日常に希望を持たない人がする瞳だ。

「私と同じ」

泣きそうになった。この病院には彼女と同じように絶望しか持たない者が大勢いるのだと、わかってしまったからだ。自分だけではない。一人になりたいと思っているのは。

彼女は彼の知らない所で彼に気付かされた。

自分と同じ目をする彼は一体どんな声をしているんだろう。どんな性格なんだろう。そう、一目見ただけで興味を持った。

「もしかしたら、一目惚れだったのかな？」

思ったよりもお人好しで、びっくりしたけど  
またそれが私の好みだったんだよね

「でも、他の人も放つといってくれはしないけど」

思わず半目になって、勇也の鼻をつつく。成績がよくて、運動ができて、性格がよくて、料理もできる。こんな彼を放つとく女子は少なくて、バレンタインなどよくチョコを持って帰ってはその処理に困っていた。しかもそのチョコのお返しに自分の手作りクッキーなどあげるものだから更に人気アツプしている。中にはそのクッキーの美味しさに逆に自分のチョコが恥ずかしくて泣き出す子もいたらしいが。

「もう、どうしてそんなにモテるのよ」

理不尽なことを述べて、自分が情なく思えた。彼の胸に顔を擦り付けて、千歳は目をつぶる。

二年前までどこにも居場所がなかった彼女に暖かい所をくれたのは彼で、彼女を温めてくれたのも彼だ。いつでも勇也を見ていたのは彼女として当然だろう。なのに、学校では自分よりも他の女子の

方が彼を見ている。それは嫌だなあ、といつも千歳は思っていた。

「勇也の全て、全部私のなのに」

言って恥ずかしくなる。そんなことありえないのにと自分で自分を嘲る。

「そんな嬉しいこと言っただろうするんだよ」

「勇也！起きてたのっ！」

いつの間にか身体はがっちりと彼に拘束され、身動きが取れなくなっていた。密着した身体は更に熱くなり、顔も同じく赤くなる。彼は意地悪い笑みを浮かべていて、彼女のおでこにキスをする。

「ちょ、ちょ、待って！」

「何で？」

「ば、馬鹿！わかってるくせに！」

「なあにが？」

「そうだった！勇也は意地悪だったんだ」

わぁんと泣きながらじたばたする彼女を優しく抱き締めながら勇也は時計を見る。八時二十分。かなり遅く起きた方だ。今日は丁度大学の登校日ではないので、のんびりと家で過ごせる。たまには実家に帰って家事でもしてやらないとなぁっと思心の中で考える。

「俺がモテるのは否定しないけど、お前はどうかんだよ？」

「え？」

「やっぱり気付いてないのか？お前も外出る度に誰かに好まれてるんだからな」

知らなかった

勇也は大人しくなった千歳に苦笑して身体を放した。散らばっている服をきつちりと着始める。茫然とそれを見守っていた彼女はふと自分も裸だということに気付く。慌てて服を着ようと床に手を延ばしたが、そのまま落ちる。

「いったあい！」

「何、やってんだお前………？」

勇也は千歳の身体を持ち上げて、起こす。恥ずかしそうに顔を真っ

赤にして、彼女はすぐに服を着始めた。その仕種が可愛くて、つい笑みをこぼしてしまう。

「こんな所母さんに見られたら」

「多分、見られたと思う。ドアの音したから」

一気に彼の顔は青くなる。よりによって初めての朝を彼女の母親に見られる、何て哀しいんだろう。固まってしまった彼の顔の前で千歳は手を振ってみせる。瞬きもしない。頬を搔いて彼女は勇也の頬にキスをする。

「なっ！」

「だあいじょうぶ！何も言わないよ。逆に子供催促してきそうで怖いもん」

楽観的な彼女の言葉に彼はがくつと肩を落とした。だが、千歳の母親のことは千歳が一番知っているのは当たり前で、あながち嘘じゃないかとも思い直す。

「お前、性格変わったよなあ」

「そっ？」

「うん。前はもっとふざけた振りをして本当のこと話さなかったも  
ん」

きよとんとした顔をして、千歳は思案する。言われるまで気付かなか  
った。

何か思いついたのか彼女はにっこりと無邪気な笑顔を向ける。

「それはやっぱり勇也のせいだよ」

「俺？」

「うん」

だって、私にここまで深入りしてきたの……貴方が初めてだもん

「よ！元気が？」

「勇也！また来てくれたんだ」

「まあな。お前はまだ退院できそうにないなあ」

「うん。いつになるかわからないの」

淋しそうな顔に勇也は首を傾げる。まだ二人が付き合う前の話。勇也が学校に通い始めてしばらくしてからのことだ。いつものように彼は彼女の見舞いに来ていた。場所はもちろん全ての始まり、あの屋上。

「んな顔するなよ。更に退院延びるぞ？大丈夫。退院するまで見舞いに来てやるからさ」

軽い一言。おそらくそこまで深く考えて述べた言葉ではないだろう。それは何となくわかっていた千歳だが、何気ないその言葉が彼女の心に深く響いた。

今まで何度なく友達関係でその言葉は聞いた。けれど本当にそんなことをしてくれる者はいなくて、勇也と出逢うまではずっと一人だった。けれど、勇也なら、今までずっと来てくれたこの人なら本当に来てくれると思った。

どうしよう

本当に、好きになっちゃったよ

どんな時でも

どんな言葉も

貴方と一緒になら

何も怖くない

## 番外編 一目惚れ？（後書き）

番外編です。千歳視点です。ここでは最終話のちょっとした続きと、彼女が勇也と違う所にいた時のお話などを書いて行きたいと思いません。

次は千歳が学校に行けるようになった頃の話を書いていきます。今、二十七話目なので、丁度三十話になるように書くかもしれません。どうか、お付き合いして下さい。

## 番外編 会いたい

初めて

一緒にいたい人と出逢った

ひどい

勇也にとってあそこは他の人が来ても何とも思わないんだ

勇也が千歳の見舞いに来始めて、彼が屋上に他の女生徒を連れて来た日のこと。千歳は自分の病室に入り、その場に崩れた。自分でもわからないくらい心が痛かった。頬に温かい滴がこぼれ落ちる。発作の痛みにも泣かない彼女が、勇也のその行動にだけに涙した。

「ぎゅぎゅぎゅ」

彼ともっと一緒にいたい

自分から逃げて来たというのにすぐに彼に会いたくなる。今まで一人になりたいと、誰とも会いたくないと思ってきたのに、何故ここまで勇也を求めてしまうのか。

次の日も、その次の日も勇也が屋上に来ていたことを千歳は知っていた。けれど出て行くことはできなくて、顔を出すことができなくて、その度に彼女自身も胸を締めつけられたいた。

ああ、やっぱり私

勇也が好きなんだ

この時初めて自覚をした。友達も恋人も本物だと思える存在なんて誰もいなくて、いつもどこか孤独だった。けれど、あの屋上に足を踏み入れてから、勇也と出逢ってからその孤独さがなくなった。話ができなくても彼の顔を見ただけで一日を乗り越えられる気がするほどだった。

だけどその気持ちを伝えることはおそらくないだろう。自分はいっ消失てしまっかわからない存在だから。

どくん

心臓が揺れる。いつか、そんな風に自分で思うほど淋しさを息が詰まった。もうすぐ勇也の誕生日。千歳は彼にびっくりをプレゼント

すると言った。けれどまだそれをするには準備が足りない。

明日、お母さんが来る。

話をしなきゃ。

目を閉じればそこには鮮明に浮かび上がる彼の笑顔。冷たくなった身体はほんのりと熱をおびる。

長いまっげは微かに震えてじわりと湿っていく。

どうして

勇也と出逢ってしまったんだろうか

神という存在を信じるわけではないが、彼に出逢ったことが偶然とは思えない。感謝すべき出逢いに彼女は逆に辛さを覚える。彼に会わなければ、恋をしなければ、ここまで病気について臆病になることはなかったのにと。勇也のあの笑顔も、あの温かさも知らずに済んだのに。

「好き」

届くことがない気持ちを小さく呟いて彼女はその場に泣き崩れた。

「千歳？」

「へっ？」

いきなり勇也の顔がアップで目に映って彼女は驚く。二年前とは顔つきが全く違う彼は、それでもやっぱり優しそうな表情を彼女に向けている。二年前と変わらない、二年前と違う笑顔。千歳は微笑んで、首を振る。

「ごめんごめん、何でもないよ」

「もう、千歳も考えてくれよ」

「まだお母さんと会う時のこと考えてるの？どうせ同じ家なんだから考えても無駄だよ」

すっぱりと言われて彼は確かにと頷く。けれどやはり部屋から出る勇気が持てない。

二年前では想像もできなかったこんな幸せな日々。こんな日を考えることができるのでさえ、ありえないと思っていた。だけど、彼はそれを簡単に彼女にやらせた。

誕生日プレゼントとして勇也が彼女に『愛しい』をプレゼントしてから。

「ねえ、勇也。愛しいはまだ健在だよな？」

「あ？何言ってるんだ？まだとかもつととかじゃないだろ？」

勇也は千歳の肩を抱き寄せて、耳元で囁く。

愛しいは

永遠に

「お母さん、私学校に行きたい」

病院に入ってからしばらくはそんなことを口にしていたのを彼女は覚えていた。買って来た花を花瓶に飾っていた母親は徐々に聞くその言葉に手を止めた。驚愕で彼女の顔も見れなかった。

夏が過ぎるところくらいから彼女はそんなことを言わなくなった。学校、それは彼女が求める場所ではないと気付いたからだ。偽りの関係、偽りの感情、偽りの想い、それらが渦巻く所に行きたいと思えなくなってしまうた。

「な、にいつてるの？駄目に決まってるじゃない！少しでも安静にしていないと」

「少しでも生き延びられるために何もしないでこんな所に閉じ籠もっているよりも、私は私のしたいことをやる！私のことを思うのならもっとたくさんのおい出を作らせてよ！」

恋という気持ちを持ってても彼女の心に余裕というものはなくて、感情を偽ることもできなかった。千歳は残酷なほど嫌味な笑顔を母親に向けて、低い声音で呟いた。

「死ぬ前に、やっておきたいことがあるの。やらせてくれるよね？」

全てが彼女にとってもどかしいものだった。心臓病、そんなもののために生活を制限されて、一人で外を羨ましそうに眺める。それなら、リスクを負ってでもやりたいことをやりたい。

けれど、思っても本当に実行するには勇気が必要だった。母親とはまた違う意味で千歳も外に出るのは怖かった。病室でも孤独だった自分が外に出て誰かと笑っていられるのか、と。

勇也、勇也、勇也。

そう頭の中で思い浮かべる度にそんな不安は彼女の中から姿を消した。彼女はまだパリっとしたシャツを着て、懐しい学校への道のりを歩く。

会いたい

会いたい

早く貴方に会いたい

足は次第に早くなって、いつの間にか学校に到着していた。まだ学校に入っていないことを祈って、千歳は門で勇也を待つ。しばらくして彼の顔を見つけた時、広がる熱を感じた。

千歳は思い出し笑いを浮かべて部屋の扉に手をかけた。案の定それを慌てて勇也が止める。何をそこまで気にすることがあるのだろうか、と彼女は半目にして溜め息をついた。

「ほら、さつさと覚悟を決める！」

「だ、だって千歳！」

有無を言わずに彼女は扉を放った。スタスタと歩く彼女の後を仕方なく勇也もついて行く。

男が後ろに隠れている姿は、何とも情ないものだが、理由が理由なだけに千歳は思わず嘖き出してしまふ。

「ねえ、勇也。あの屋上覚えてる？」

「ああ。もちろん」

「……………私との出逢いをどう思った？」

怖くて聞けなかったそれを懸命に言葉にした。勇也は微かに震える小さな背中を抱き締める。

伝わってくる温もりに千歳はほっと身体に入っていた力を抜いた。

「感謝してるよ。あの出逢いに、君の病気にも」

聞きたかったその言葉。千歳は嬉しそうに笑って、涙した。

あの出逢いに

あの病気に

今は感謝できる

それは手に入れた

幸せが存在するから



## 番外編 会いたい（後書き）

番外編二話目です。やっぱりあと二話ほど書くと思います。次は何ですかねえ、付き合うところかな？付き合って彼女が自分の病気に ついて語るところを書きたいと思います。ほとんどが孤独の時間を 書いていくので、暗いですが頑張って読んで下さい。

番外編 愛しい

望みを叶えてくれたのも

温もりをくれたのも

貴方だった

「ねえねえ、三島さんは清水先輩とどういう関係なの？」

学校に通ってからすぐに聞かれたのはこれだった。毎日一緒に登校して下校していれば簡単に予想できる状況だ。内心でうざったく感じながらも懸命に笑顔を作る。

「ただの病院仲間」

ずきん

自分で言っただけ胸が痛む。息が止まりそうになりながらも隣りにいる女子を一瞥する。

えーとか、うっそだあーとか訳のわからない言葉を述べている。登校し始めてから自称親友の子達はごめんと言いながらまた千歳に近づいてきた。

「病院仲間であんなに仲良くなならないよ！本当は恋人じゃないのお？」

そんな風に思うくらいなら、最初からそれ前提で聞いて来てよ。

「違うよ。だってどっちも告白なんかしてないもん」

「えー！勿体ないよ！早く告っちゃいな」

人の気持ちも知らないで……勝手なこと言わないでよ！

学校、それは千歳にとって勇也に会うための機会で、クラスメイトと馴れ合うためではなかった。久々にきたのもあってクラスの人は彼女を放っておいてはくれなかった。よく二年の教室に顔を見せるのも見られて、女子達はよく勇也関係の話を持ち出して来る。

付き合うなんて、そんなことできるわけがない。

そう、その時は思っていた。彼女は心から誓っていた。けれど、その日思いがけないことが起こる。

ご飯を運んでいた箸を止めて、千歳は思わず顔を赤くする。二年前のあの時のことを思い出して、自分の行動に恥ずかしくなったのだ。

そっだ、どうしてあの時あんなこと言っちゃったんだろうっ

「やあね、ご飯食べながら赤くなるなんて」

「え？あ、へ？」

「どうせ、昨夜のことでも思い出してたんでしょ？」

母親にそう言われて更に顔を赤くする。すっかり忘れていた内容を掘り返してしまったからだ。見れば隣りにいる勇也はむせていた。せっかく何も言わずにいた母親は千歳の反応に口を出せずにはいられなくなったのだ。

「お母さん！勇也がびっくりしてるじゃない！」

「お母さんだってびっくりよ。朝にあんな光景見ちゃって」

「あ、あれは！」

「でも、嬉しいわあ。やっと千歳が女になったのね。赤ちゃんが楽しみね」

予感的中。やはり千歳の母親は子供を要求してきた。だが、それは無謀な願いだと誰もが思う。勇也はまだ大学生で、千歳も高校生なのだから。

「まだ数年先のことでしょ。焦らないですよ。こんな状態で子供なんか産んだら、その子が可哀相だよ」

「全く、あんたはまだ若いのにどうしてそう先のことを想定して行動するかねえ。もう少し我がままになってもいいのに」

そう、あの時も諦めてた。

どうせ、私は死んでしまうのだからと。

「お前の誕生日っていつだ？」

「あ、何々？何かくれんの？私はね、今から二週間後かな？」

「近いなあ。何が欲しい？」

千歳の頭の中には欲しいものは一つだけ。だけど、それは求めてはいけない。そう彼女はわかっているつもりだった。しかし、自分の意志とは関係なく口が動いていた。

「愛しいを……」

欲しかった。誰よりも、何よりも勇也が欲しいと思っていた。けれどそれを口に出してはいけないと、願ってはいけなくも思っていた。自分は死んでしまう。もし勇也が千歳と一緒にいることを選んでくれても、千歳は彼を残して逝かなければならない。そんな残酷なことでできないから、と。

小さく呟いたものだから何とか誤魔化そうとすぐに笑顔になる。勇也とわかれて自分の自室に戻った時、彼女は思わず泣いた。

「どうして、こんなに苦しいんだろう?」

毎日彼と顔を合わせているのに

どうして?

恋がどういったものなのか知らない彼女は、どうしようもない苦しみを味わった。

自分の誕生日がきて、もし彼が本当に愛しいをプレゼントしてくれてもそれは断わるしかない。受け取ってはいけない。

でも、結局自分の願望には敵わなかったんだよねえ。

自分の不甲斐なさに溜め息をついた。心に固く誓っても、目の前にその餌をばら撒かれたら犬よりも脆くそれに飛びついてしまう。結局、あの愛しいも聞かれていて、しかも彼は彼女にそれをプレゼントしてくれた。だから、思わず受け取ってしまった。その気持ちを。

付き合って、デートして、キスして、本当嬉しかったのに……。

あれだけ踏み出してきた人に内緒のままではいられなかった

「勇也君、いい子ね」

「え？」

「あんなに親身になってくれる子が千歳の傍にいてくれてよかった」

母親が赤くなつた瞳を千歳に向けて、彼女を抱き寄せてきた。先天性心臓病、そう聞いても勇也は嫌な顔など一つもしなかった。普通彼女がそんな病気になつているとしたら絶望して泣き叫ぶか、嫌になつて別れるか、その二つだけだと思つていた。ドラマなように一緒に乗り越えてくれる人なんていないと思つた。

「ごめんね。いつも傍にすることができなくて」

「お母さん仕事でしょ。気にしてない」

「だけど、淋しかったでしょう？いつも一人で、いつも孤独で。いつくるかわからない発作に怯えて昼も夜もこの部屋で一人つきりで」

「  
つ！！」

久しぶりに感じた母親の温もりに目頭が熱くなる。ぽたぽたと涙を落として、胸に頭を擦り寄せた。

優しく撫でられる背中が心地好くて、千歳は微笑する。病気の不安が消えるわけではないが、心配されている、大事に思われている。その事実が嬉しくて、安心する。

「本当、よく千歳のことわかっているのね。彼」

「え？」

「話をしてあげてって彼に言われたの。貴方がそれを望んでいるからって」

知らない所でも

私は勇也に支えられている。

「ねえ、勇也。いつからそんなに私のこと理解するようになった？」

「はあ？俺今でも千歳のこと理解してないと思ってるんだけど」

返ってきた答えは意外なもので、千歳は未だに顔の赤い勇也をまじまじと見つめた。

「だって、お前こころ性格変わるんだもん」

「どこが？」

「人のことからかって遊んだり、いきなり可愛くなったり、素直になったり、泣いたり、キレたり、見ててあきない」

「そ、そんな変わってないよ！勇也の気のせいじゃない？」

「まさか！ずっと見てるんだぞ？」

「ずっとって、たった二年じゃない！」

「おー。そうだ。たった二年だ。じゃあ、もっと時間をかけて全部見てやる！」

売り言葉に買い言葉。なのだろうが、千歳は顔を赤くする。永遠を誓った仲だとしても、一夜を共にした仲であっても、照れるものは照れるのだ、と自分に言い聞かせる。

二年前から貴方は

ずっと私を見てくれていたんだよね？



番外編 愛しい(後書き)

番外編三話目です。えっと、そんなに暗い話にならなかったの  
で安心していきます。次はやつと最後の話です。一気に話は飛んで手術  
前にまでいきます。そして手術。明日にでも書けるといいなあ。

番外編 過去も現在も未来も

多分これが

幸せって言うんだろっね

シンとした病室で彼女は一人、布団を被っていた。外から入って来る月明かりは千歳を優しく照らしている。

「うっ  
」

発作までとは言わないが、動悸がする。一旦なるとなかなか元に戻らない。心臓の音が邪魔をして、彼女を眠りから遠ざける。

「勇也  
」

いないとわかっていても眩いてしまう。ぼたぼたとシーツに跡をつける。  
いくら勇也に励まされても消えない病気の不安。いつも忘れようと努力してきた。だけど、その度に起こる発作や動悸が忘れさせてくれなかった。

『諦めないでくれよ。苦しいのはお前だけじゃないんだぞ？怖いなら一緒に泣いてやる。辛いなら愚痴を聞いてやる。苛つくならそれを俺にぶつければいい。悩んでも迷ってもいい。だけど、逃げないでくれ』

ふと、彼に言われた言葉を思い出す。涙は自然と止まり、目を瞠る。今まで、そんな言葉をかけてくれた者などいなかった。自分のことのように傷付いて、案じてくれる者など他人ではいなかった。だからこそ、彼女は彼を好きになった。

『諦めないでくれ。俺は一年後も二年後も三年後もその先ずっと、ずっと千歳と生きていきたいんだ。ずっと……ずっと千歳と笑っていきたいんだ！』

一年後も、二年後も

私は本当に生きてるんだろうか？

「ううん、生きてるかなんて気にしなくていい。生きればいいんだ」

たくさん、勇也に愚痴を吐いた。不安を述べた。そして、やっとわかったことがある。病気は忘れるんじゃない。受け止めて、対処方を考えなければ意味がない。今、ここで気持ちまでも負けていたら、すぐに病気にのまれて死んでしまう。

「大丈夫。今は一人じゃない」

愛しい人の顔を思い浮かべて、彼女はいつの間にか動悸から解放されて、眠りについた。

「今日は肉じゃが！」

「お！最近好きだな。煮物」

「うん、肉じゃがは甘いから更に好き」

勇也と買い物に出た千歳は買い物カゴにじゃが芋やタマネギを入れていく。他にも人参、グリーンピース、豚肉を入れる。

「千歳さあ、みりん入れてる？」

「え？入れるものなの？」

「いや、入れてる人の方が少ないかも知れないけど、せめて肉の下味くらいには入れといた方が美味しいと思うけど」

「下味……………」

「もしかして、それもしてない？」

千歳はにっこりと微笑んで思いきり頷いた。肉の下味といっても、結局人参などと一緒に煮込んでしまうから皆省きがちだが、やっぱりしておいた方がしつかりと味がつく。

「材料切っている間だけでもいいから、しといた方がいいぞ」

「わかった。何で味つければいい？」

「酒とみりんと醤油かな」

うんと、素直に頷いて、彼女はルンルンと会計を済ませた。荷物は勇也と半分ずつ持って、あいた手を握る。

「へへ、何か未だに妻とかっていう感じしないんだよねえ」

「まあ、付き合いだして一年で結婚、それからまだ一年しかたつてないしな」

一年たつても、二年たつても、彼女はまだ俺の隣りにいる。

手の温もりがなくならないことに勇也は嬉しく感じる。一年前に諦めそうになった存在を手放さないでよかったと心から思う。

「永遠の恋人から永遠の夫婦へ」

彼が呟いた言葉で彼女はまたあの時のことを思い浮かべる。

手術着をきた千歳は一つ息をついた。勇也が来るまでの時間、一人で心を落ち着かせていた。だが、緊張は一向にほぐれることはない。手術する時に付属品はつけてはいけない。綺麗な宝石がついている指輪を名残惜しそうに外して、千歳は一つ息をつく。

今まで、病気から逃げることで精一杯だった。どうせ死ぬとか、どうせ治らないとか、そんな弱気なことを考えていた。けれど、勇也と出逢ってから、付き合いってから、彼女の中でそんな気持ちは薄れていた。

自分でも不思議なほど、勇也は彼女の中で大きくて優しく温かかった。

「大丈夫大丈夫」

何回その言葉を心の中で呟いても心臓の高鳴りは落ち着かない。

「千歳」

病室に静かに入ってきたのはついこの間夫となった者。顔を見ただけでどこか安心して、笑みをこぼした。

しばらく二人で言葉を交わしてついに時間がきた。看護師に呼ばれて彼女は手術室に向かう。たった三十分くらいしか話していないのに、あれだけ緊張で固くなっていた身体はあつたかくなって落ち着いている。

ありがとう

千歳は手術台に横たわりながら、心の中で述べた。

今ここで一生を終えてしまっても、後悔は絶対にしないと思えるほど、彼女は幸せだった。

八時間という大手術を終えて彼女はぼんやりとする視界の中から大好きな人の姿を認める。手術前にあの言葉を彼に言った。だから、次に会えた時も言わなければいけない。そのまま眠りそうになるのを我慢して、彼女は小さく、それでも彼に聞こえるくらいの大きさを言った。

「ただいま」

あまり泣かない貴方が

あの時だけはすごく涙を流して

必死に言葉を返してくれたよね

「おかえり」

今でも昨日のことのように思い出せる

あの時のこと

屋上の出逢いから

付き合い

デート

プロポーズ

結婚

手術

どんな時も

いつでも貴方が隣りにいてくれた

私に温もりをくれた

『限られた時間の中で』

高校時代の彼との出逢いから

私の病気が治るまでの

その短い時間を

私達はそう呼ぶようになった

その時でしか

その時期でしか

感じられない想いや気持ちが必要あるから

その一つ一つを私達は忘れないように

大切に

心にしまっている

「ねえ、勇也」

「あ？」

「本当に、私達の生活が落ち着いたらさ」

千歳は勇也の腕に絡みついて、静かに呟いた。

「可愛い赤ちゃん産みたいよね」

「っ、おま、可愛いこと言うなよな」

照れる勇也は最初の頃を思い出させる。だけど、あの頃とははつきりと違う。

彼女は嬉しそうに目を細めて、今ある幸せを噛み締める。

過去も

現在も

未来も

私達は変わらず愛し合う

そう

この『限られた時間の中で』



## 番外編 過去も現在も未来も（後書き）

はい、番外編最終話です。そして、この話で限られた時間の中でを修了いたします。長い間お付き合いして頂き大変感謝しています。思ったよりも落ち着いた話ができ上がったので、かなり満足しております。

もし、よかったら感想及び評価、送ってけると嬉しいです。では、また機会があったらお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6630b/>

---

限られた時間の中で

2011年2月21日08時16分発行